

- 3 D09 海水中の微量有機態重金属元素の状態分析
 * 平田静子・山本勇蔵(中国工試・広島大理)
 (14:25~15:05) 座長 原口紘三
- 3 D10 海洋における溶存有機金属化合物の存在量と分布
 * 杉村行男・鈴木 款(気象研)
- 3 D11 海洋における金属元素の分布におよぼす溶存有機物の役割
 * 廣瀬勝己・鈴木 款・杉村行男(気象研)
 (15:05~15:45) 座長 西村雅吉
- 3 D12 海洋における溶存有機機金属化合物の分子量(第2報) * 鈴木 款・杉村行男・三宅泰雄(気象研・地化協)
- 3 D13 海洋におけるセレンの循環
 * 鈴木 款・三宅泰雄・猿橋勝子・杉村行男(気象研・地化協)
 (15:45~16:25) 座長 鈴木 款
- 3 D14 天然水中の溶存金属酵素の存在とその意義
 * 原口紘三・小林憲正・岩瀬公一・藤原祺多夫・不破敬一郎(東大理)
- 3 D15 霞ヶ浦における alkaline phosphatase 活性(第1報) * 岩瀬公一・小林憲正・上田弘孝・田尾博明・藤原祺多夫・原口紘三・大槻 晃・不破敬一郎(東大理・国立公害研)
 — 総合討論 —

講演要旨集 当日価 3,300 円(要旨集の送附のみも受付ます)

懇親会 10月7日(火) 18時から、林田ホテル(電話)(0992)24-4111)にて、
 会費 4,000 円(学生 2,000 円)

訂正: 本年会会告(本ニュース No. 89 に掲載)の〔交通〕欄の市営バス鶴ヶ崎行(10番線)は鴨池港行(10番線)に変更になりました。

新旧合同評議員会報告

とき: 1979年12月8日(土)

ところ: 赤門学生会館

出席者: 半谷会長、安藤、石渡、一國、岡部、小椋、金森、鎌田、木越、酒井、佐藤、柴田、樽谷、長沢、本田、増田、松尾、松本、馬淵、綿抜各評議員

報告

1. 日本学術会議関係

学術会議の中に高レベル放射性廃棄物小委員会が設置されることになった。

地学関係3研究所のうち1つの設立をはかる検討会が予定されている。

2. 各委員会関係

庶務: 学会事務センターとの事務契約について説明があった。

財政: 54年度学術定期刊行物助成の書類を提出した。海外に配布されている Geochem. J. は 275 部である。

編集: Geochem. J. 13巻5号は1月、6号は3月に発行の予定である。

ニュース: No.88は“地球化学”にとじこみとして発行の予定である。内容は役員選挙結果、年会総会報告など。

行事: 12月例会(小沼、長沢両氏の講演)の出席者は30名であった。

議事

1. 入退会

入会: 正会員 6 名、退会: 正会員 1 名、賛助会員 2 口(この結果、12月4日現在の会員数は正会員 805 名、名誉会員 4 名、賛助会員 15 名、計 824 名となった)。

2. 2年間会費滞納者の取扱いについて

滞納者に再度連絡することにした。

3. 1980年度年会

鎌田評議員から年会の実施予定について説明があった。

4. 名誉会員の推薦

半谷会長、木越評議員から三宅泰雄氏を名誉会員に推薦したい旨提案があり、田評議員で投票した結果、次会の総会で提案することが可決された。

5. 2月例会

木越新会長が会長講演を行なうことになった。

6. 学会事務センターとの1980年度事務契約

業務委託費の値上げがあった。これを含めて新契約を承認した。

7. Geochem. J. の寄贈と交換

交換2件(ユーゴスラビア、中国科学院)、寄贈2件(イギリス、Bioscience)を承認した。

引きつづき、新評議員懇談会が開かれ、各種委員会の分担を仮決定した。

編集者 佐藤 和 郎

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会センタービル(4F) 日本学会

事務センター内

電話 東京 03(815)1903

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 91

1981. II. 1

1980年度年会を終って

鎌田 政 明

1980年度年会は10月6, 7, 8日の3日間、鹿児島大学教養部で開催され、6つの課題講演、一般講演あわせて220の講演があり、盛会裡に終わった。特別講演の中一つは演者の急用で中止になったが、懇親会も240名の参加という盛況で、お世話をした1人としてはっとしている。

準備はほゞ1年前からはじめたが、これは準備する事務局の少人数(3人)を考えてのことで、私がとくに気が早かったわけではない。前回の事務局(東工大松尾教授ほか)からのノウハウの伝受を徹底的にしていたことも役立ったと思う。

会場の教養部の設備、機器などの充実にも大変助けられ、また関係諸先生の御盡力のたまものであった。

要旨の印刷部数567部、少し足りなかった。外国(中国ほか)からの予約もあるので600~660部は必要だったと思う。と同時に、積極的なPRも会の存在を一般に知らしめることであり、努力したつもりである。要旨集は初日の午前中ですべて売り切れ、PRして買ってもらっていたものを一部たのみ込んで回収した一幕もあった。

要旨の集りはいつものことのようにであるが仲々期日通りには行かない。自分自身にも覚えがあるが、一回当事者になってみるとそれがいかに迷惑をかけるかをやというほど味わうことになった。

ともあれ年会の趣旨は、できるだけ多くの人が集り、熱心に議論をたたかわせ、今日の問題についてより深く認識を深めあうことにつきて思う。

遠路はるばる御来鹿いただいた会員諸氏がそれぞれの専門でこの目的を十分に達せられたかどうか、自信はない。今はただ何とか終わったというささやかな満足感にひたっているだけである。

事務局の力の至らなかったため、いろいろ御不便もかけたと思う。次回の、さらにはまたその後のよりよい年会のために私どものささやかな経験が生かされ

ばと念じている。

最後に、年会の主役であった会員諸氏の御協力に心から御礼申しあげる。

お知らせ

1981年度日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

期日 1981年10月10日(土)~10月12日(月)

会場 東海大学海洋学部(静岡県清水市折戸 1,000)

内容 課題講演、一般講演および特別講演 課題講演は「金属元素の溶存状態」「堆積環境と堆積物の地球化学」「地熱エネルギーと地球化学」などが予定されています。詳細は次号の地球化学会ニュースを御覧下さい。

講演申込締切 6月27日(土)

講演要旨提出締切 8月15日(土) 申込受付次第、オフセット用原稿用紙をお送り致します。

懇親会 10月11日(日) 18時から、三保文化ランドにて、
 会費 4,000 円(学生 2,000 円)

参加、要旨集および懇親会申込締切 9月5日(土)

以上の申込みは必ず所定の申込用紙を用いて下さい。これらの用紙は本ニュース(次号)に添付予定のものを利用するか、または下記あて御請求下さい。参加費は不用です。要旨集代金 3,000 円(学生 2,000 円)(郵送料を含む)、懇親会費は上記申込期日までに、銀行振込(駿河銀行清水港支店、普通: 603648、日本地球化学会年会)または郵便振替(東京 9-155798、東海大学海洋学部、岡部史郎)にて御送金下さい。要旨集代

地球化学会会員名簿の改訂

現在、庶務では会員名簿改定の準備を進めています。変更の有無にかかわらず、会員各位は同封のはがきに必要事項をご記入の上、遅くとも3月末までに庶務あてご返送下さい。新しい名簿は6月末には刊行の予定です。ご協力をお願い致します。

金は予約申込のないときは3,300円となります。
申込先 〒424 清水市折戸 1,000 東海大学海洋学
部内, 1981年度日本地球化学会実行委員会 岡部史
郎(もしくは豊田恵聖)
(電話:0543-34-0411, 内線 300 または 251)
宿泊 清水市および静岡市にはホテルなど宿泊施設が
あります。このことについては次号のニュースでお
知らせする予定です。(岡 部 史 郎)

1980年度第1回評議員会報告

とき:1980年2月9日(出)

ところ:赤門学士会館

出席者:木越会長, 北野副会長, 石渡, 一國, 金森,
佐藤, 柴田, 杉村, 不破, 本田, 松尾, 馬淵, 綿拔
各評議員, 鳥居監事, 増田 G. J. 編集委員長(オブ
ザーバー)

報告

1. 日本学術会議関係
高レベル放射性廃棄物小委員会が1月28日に発足
した。
隕石学・宇宙学の振興のために南極隕石の研究を
推進する研究所を設置するよう働きかけることにし
た。(別掲記事参照)
2. 各委員会関係
財政:G. J. 刊行助成金148万円が交付された。
編集:G. J. 13巻5号は2月中, 6号は3月中旬に刊
行の予定である。
行事:2月例会(会長講演)が2月9日15時から
東大理学部化学教室で行われた。出席者は29
名であった。
3. 極地問題専門委員会
MSSTS プロジェクトによるロス海西側の大陸棚
のドリリングが1979年10月~11月に実施された。

議事

1. 評議員の会務分担について
庶務担当 一國評議員, 編集担当 松尾評議員,
財政担当 綿拔評議員, 行事担当 松本評議員,
ニュース発行担当 佐藤評議員
2. 編集委員会委員の交代について
G. J. の managing editors を小穴進也氏, 杉崎隆
一氏とした。
3. 本年度年会について
鎌田評議員から提出された実施案について審議し,
その要点を次回のニュースに掲載することにした。
4. 6月例会について
東京で開催することとし, その詳細については幹
事会に一任した。

5. 入退会について

1979年12月末までの新入会は2名, 退会は6名で
12月末現在の会員数は正会員 801名, 賛助会員15名,
名誉会員4名, 計820名となった。

6. 柴田名誉会員逝去の取扱いについて
会誌への掲載などすべての取扱いを会長の責任に
おいて決定することにした。

1980年度第2回評議員会報告

とき:1980年6月14日(出)

ところ:赤門学士会館

出席者:木越会長, 北野副会長, 石渡, 一國, 金森,
鎌田, 酒井, 佐藤, 柴田, 杉村, 田中, 長沢, 坂野,
不破, 本田, 松尾, 松本, 綿拔 各評議員, 鳥居監
事, 増田 G. J. 編集委員長(オブザーバー), 高野(オブ
ザーバー)

報告

1. 日本学術会議関係
第5回年代同位体国際会議(略称)の学術会議後
援を申請中である。
2. 各委員会関係
財政:本年度のG. J. 刊行助成金として159 万円
の内定通知があった。
編集:1980~1981年度の編集委員を次のように決
定した:一國雅巳, 伊東敬祐, 石渡良志, 小
沼直樹, 小倉紀雄, 木越邦彦, 北野康, 佐藤
和郎, 杉崎隆一, 高岡宣雄, 田中重男, 野津
憲治, 坂野昇平, 松本英二, 松尾禎士, 松久
幸敬, 増田康之, 増田彰正。
G. J. に掲載する論文については今後 re-
ceived と accepted の両方の日付を載せるこ
とにした。

行事:6月例会(テーマ:極微量元素の分析)が
6月14日14時から東大理学部化学教室で行
われた。出席者は23名であった。

ニュース:No.88とNo.89を発行した。

3. 幹事会

第1回幹事会を4月5日13時30分から学習院大学
で開催し, 6月例会の講演を室蘭工大 室住正世氏,
青山学院大 平尾良光氏に依頼した。

庶務および財政担当の評議員の補佐役として, 東大
高野穆一郎氏がオブザーバーの資格で評議員会に出
席できるよう, 次回の評議員会に提案することにし
た。

議事

1. オブザーバーの評議員会出席について
東大 高野穆一郎氏(庶務および財政担当評議員

の補佐)の出席を承認した。

2. 本年度年会について

総会, 懇親会を10月7日に行うことを決定した。

3. 1981年度予算案について

財政担当評議員から提出された案について審議し
た。

4. 役員の任期を3年とする件について

副会長がこの問題を検討するための working
group を召集することにした。

5. 入退会について

1980年5月末までの新入会は8名, 退会は10名,
(内2名は1980年12月末退会)で, 5月末現在の会
員数は正会員 802名, 賛助会員15名, 名誉会員3名,
計820名となった。

6. 会員名簿の発行について

1981年度の名簿発行に備えて, 庶務から各会員宛
に連絡先, 所属などの回答用はがきを送ることにし
た。

1980年度日本地球化学会総会報告

10月7日13時から14時まで, 鹿児島大学において会
員約50名出席のもとに行われた。

1. 会長挨拶
2. 年会委員長挨拶
3. 名誉会員の推せん(別掲)
4. 1979年度事業および決算報告
鳥居監事の監査結果報告
5. 1980年度事業および会計中間報告
6. 1981年度事業計画および予算案
7. 次年度大会予定

1979年度事業報告

1. 会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1978年12月末	804	16	4	824
入会	29	1	0	30
退会	32	2	0	34
1979年12月末	801	15	4	820

2. 委員会等開催回数

総会	1	幹事会	2	行事	2
年会	1	財政	2	将来計画	1
例会	2	編集	2	極地	2
評議員会	4	ニュース	2		

3. 会誌発行

Geochem. J. Vol. 12 (No. 4), Vol. 13 (Nos. 1~4)
(各号とも1500部印刷)

地球化学 Vol. 12 (No. 2), Vol. 13 (No. 1)

(各号とも1000部印刷)

4. ニュース発行

No. 86, No. 87 計14頁 (各1000部印刷)

5. 学会共催

第16回理工学における同位元素研究発表会(6月25
日~27日, 東京)

第21回国際理論応用陸水学会議(8月24日~30日,
京都)

6. 例会

2月10日

Sea-water-Rock Interaction.

(1)地質学的立場から 大木靖衛氏

(2)室内実験の立場から 酒井 均氏

6月9日

放射能と地球環境 — とくに in situ 測定について

阪上正信氏

炭酸塩堆積物と水の化学環境 — 微量成分と結晶形

北野 康氏

7. 役員選挙

8. 会員名簿発行

1979年度決算報告

収入の部		予算(千円)	
1. 会費	5,394,614	(5,286)	
2. 刊行売上	3,189,592	(3,486)	
3. 広告	0	(100)	
4. 助成金	1,480,000	(1,200)	
5. 雑収入	76,578	(50)	
6. 繰越	2,148,531	(1,450)	
計	12,289,315	(11,572)	
支出の部			
1. 事業費	7,516,773	(11,448)	
1.1 出版費	5,716,886	(7,468)	
会誌印刷	4,871,276	(6,300)	
編集費	500,000	(500)	
発送費	345,610	(668)	
1.2 行事費	244,000	(300)	
1.3 名簿印刷	450,000	(500)	
1.4 事務委託	981,207	(1,184)	
1.5 会員業務郵税	124,680	(0)	
2. 管理費	1,136,777	(1,205)	
2.1 庶務費	355,200	(300)	
2.2 会議費	136,917	(300)	
2.3 通信費	3,745	(55)	
2.4 振替	338,000	(400)	
2.5 消耗品	7,585	(50)	

2.6 雑費	61,330	(100)
2.7 選挙費	234,000	(0)
3. 次期繰越金	3,635,765	(1,243)
計	12,289,315	(11,572)

1980年度事業中間報告

1. 会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1979年12月末	801	15	4	820
入会	26	0	0	26
退会	11	0	1	12
1980年8月末	816	15	3	834

2. 委員会等開催回数

総会	1	評議員会	3	編集	1
年会	1	幹事会	2	ニュース	2
例会	2	財政	1	行事	2

3. 会誌発行

Geochem. J.	Vol. 13 (Nos. 5~6), Vol. 14 (No. 1)
(各号とも1500部印刷)	
地球化学	Vol. 13 (No. 2), Vol. 14 (No. 1)
(各号とも1000部印刷)	

4. ニュース発行

No. 88, No. 89, No. 90	計18頁
------------------------	------

5. 学会共催

第17回理工学における同位元素研究発表会	(6月30日~7月2日, 東京)
----------------------	------------------

6. 例会

2月9日	
会長講演: 重力下での熱平衡 — 熱は低温部から高温部に流れるか	木越邦彦氏
6月14日	
極微量元素の分析	
(1) 海水中の重金属分析の諸問題	室住正世氏
(2) 試料への汚染を避けるために	平尾良光氏

1980年度会計中間報告 (1980. 6. 30)

収入の部	予算(千円)
1. 会費	3,554,255 (5,336)
2. 刊行売上	1,143,293 (3,986)
3. 広告	0 (100)
4. 助成金	1,590,000 (1,400)
5. 雑収入	164,849 (50)
6. 繰越金	3,635,765 (1,243)
計	9,923,313 (12,115)
支出の部	予算(千円)
1. 事業費	5,208,038 (9,646)
1.1 出版費	3,884,548 (7,946)

会誌印刷	3,255,598 (6,678)
編集費	500,000 (600)
発送費	128,950 (668)
1.2 行事費	276,400 (300)
1.3 名簿積立	250,000 (250)
1.4 事務委託	734,570 (1,000)
1.5 会員業務郵税	62,520 (150)
2. 管理費	104,604
2.1 庶務費	50,000 (400)
2.2 会議費	51,604 (300)
2.3 通信費	3,000 (55)
2.4 旅費	— (400)
2.5 消耗品	— (50)
3. 予備費	— (1,164)
計	5,312,642 (12,115)

1981年度事業計画

1. 委員会等開催回数

総会	1	評議員会	4
年会	1	幹事会	3
例会	2		

2. 会誌発行

Geochem. J.	6号	地球化学	2号
-------------	----	------	----

3. ニュース発行

3号

4. 学会共催

第18回理工学における同位元素研究発表会

5. 会員名簿発行

6. 役員選挙

1981年度予算案

収入の部	千円	前年度予算(千円)
1. 会費	5,386	(5,336)
2. 刊行物売上	4,584	(3,986)
3. 広告料	100	(100)
4. 助成金	1,500	(1,400)
5. 雑収入	50	(50)
6. 名簿積立	250	
7. 繰越金	1,164	(1,243)
計	13,034	(12,115)
支出の部		
1. 事業費	10,705	(9,646)
1.1 出版	8,535	(7,946)
会誌	6,900	(6,678)
編集	900	(600)
発送	735	(668)
1.2 行事	400	(300)

1.3 名簿	500 (250)
1.4 事務委託	1,100 (1,000)
1.5 会員業務郵税	170 (150)
2. 管理費	1,560 (1,350)
2.1 庶務費	650 (400)
2.2 会議費	300 (300)
2.3 通信費	60 (55)
2.4 旅費	500 (400)
2.5 消耗品	50 (50)
2.6 雑費	100
3. 予備費	669 (1,164)
計	13,034 (12,115)

隕石科学及び隕石による

宇宙科学研究の振興について

1980年10月23日の日本学術会議総会において標記の勧告案が提案され可決された。

1. 提案者 第4部 地質学研究連絡委員会, 地球化学・宇宙化学研究連絡会, 南極研究連絡委員会
2. 議案 標記のことについて, 下記のとおり政府に勧告すること。

記

日本学術会議は, かねてから, 国際地球化学・宇宙化学協会 (IAGC) に加盟し, 我が国における地球化学・宇宙化学研究の振興をはかってきた。また, 他方では, 南極観測の国際協力事業に当初より参加し, 極地研究の振興に努めてきた。

これらの極地研究の進展に伴い, その成果の一つとして, 我が国の調査地域内に異常な程多数の南極隕石 (やまと隕石) が発見回収され国際学会に多大の反響を呼び起してきている。とくに, これらの資料は隕石科学の研究, 隕石による宇宙科学研究に対して大きな貢献が期待されている。そのため, この際, 我が国が, これらの資料の保存・管理体制を確立し, 他に先がけて国際協力研究に貢献することは極めて大きな意義を有するものと考え。

したがって, 政府は協同研究実施のために「南極隕石研究センター (仮称)」を設立し, ついで「隕石科学研究センター (仮称)」を設立されたい。併せて広く隕石による宇宙科学研究・教育を充実するための格段の措置を講じられたい。

説 明 書

I. 隕石の意義と隕石研究の状況

隕石は45.5億年前にさかのぼる太陽系生成時の物理的・化学的諸条件と当時の多くの出来事についての唯一の物的証拠を秘めると共に, 現在に至る宇宙及び太陽系環境の記録を保持しているかけがえのない物質で

ある。隕石の研究から宇宙及び元素の起源についての手掛りを得ることや宇宙線の歴史に関する知識を引き出すことも出来る。隕石のこのような意義の重大さは, 月試料が得られた現在でも何ら変わらず, 学界の多くの専門及び関連分野の研究者により重要視されているゆえんである。また最近小惑星の反射スペクトルの研究により, その表面物質と隕石との関連が確立され太陽系起源論に貢献している。惑星の直接探査が進むと共に惑星科学への関心がますます高まりこの面からも隕石は極めて大きな関心と期待を集めている。

しかるに, 一方研究のための隕石の供給量は非常に限定されたものであり, 隕石研究の大きな制約となっていることは, やむをえないことである。我が国においては国土の狭小なため試料が乏しく研究者の関心の高さにもかかわらず研究体制としては低い水準に甘んじて来たものである。しかしながら次にのべる大量の南極隕石の発見によって, 事情は全く一変したといつてよい。なお, 伝統的に隕石の保存はその展示と共に博物館の業務とされてきたが現代科学の要請に対して博物館のみではもはや対応しきれないものとなっていることをここに付記しておくたい。

一方, 隕石科学, 宇宙化学, 惑星科学の研究体制は特に米国においてアポロ計画の進展と共に格段に充実して来たことは周知のことであるが, それ以後においても隕石試料等による宇宙科学研究に重点が置かれている。

II. 南極隕石の大量発見の意義

1969年我が国の南極観測隊は, やまと山脈において偶然数個の隕石を発見した。之等は「やまと隕石」と命名された。その後我が国では極地研究の一環として隕石探査をプロジェクトとし識者の予想をはるかに越える大量のやまと隕石を採取することに成功した。このような南極隕石の重要性は国外でいち早く認識され, 米国科学財団の支援により, 日米合同の隕石探査がマックマード基地周辺で行なわれ, やまと地域と同じく多数の隕石が発見された。米航空宇宙局は, この重大性を認識してテキサス州ヒューストンにあるジョンソン宇宙センターの月物質処理施設と人員を提供し, 科学的に価値の高い試料の配分を迅速に行いつつあり, 国際社会における南極隕石の重要性はますます高まりつつある。科学的分野において日本が先鞭をつけ, 他国が之に同調したまれな例であるといえる。やまと隕石は現在までの所, その数4,000個を越えその量は約400kgに達している。この南極隕石の発見の意義は下記のように要約できる。

- (1) 南極以外の地点で回収された全世界の隕石の総数は2,000個を少しこえる数であり, 我が国ではわず

か30個にすぎなかった。南極においていかに多数の隕石が発見されたかまた隕石資源の飛躍的增加に果たした寄与がいかに大きかったかは説明をまたない。南極隕石の現状から見て、今後かなり定期的に収集されることが期待される。したがって今まで不可能であったスケールの実験が行える。

(2) 清浄な氷上で多数の隕石が集積され発見されたという条件は、地球外物質の性質とその統計について豊富な情報を与えるのみならず地球上の岩石と識別の困難であった新種、異種の隕石の発見や従来回収困難であった微少隕石の研究を促進している。

之等のことは我々の努力次第ではこの地上において“太陽系ないし惑星の復元”が実現可能であることを示唆しているといつてよい。

一方、之と別の視点から南極隕石に固有の問題も生じている。

すなわち、

(3) 南極地域に隕石の集積した機構自体が研究課題を提供している。たとえば氷河内に長期間保存されて来た記録は同位体による年代測定により落下年代としてあきらかとなる。これらは隕石科学と氷河学極地研究との接点に新しい学際的分野を開くものである。

(4) 氷の中という汚染されにくい状態に置かれていたことの利点がある。このことはたとえば地球上における生命の起源を解明する上で大きなかぎと考えられている炭素質コンドライト中のアミノ酸等の研究にとって重要である。

以上の様な重要性にかんがみ南極隕石は国際的にも極めて大きな関心を集めるに至った。特に米国および米国科学者は積極的な調査、研究活動を急速に開始している。このままでは我が国がおくれをとることは時間の問題と考えられる。

III. 南極隕石の保存配布状況

やまと隕石および南極において日米合同探査で得られた隕石の大半は現在国立極地研究所に保存されている。やまと隕石については重量の大きいものは予備鑑定が終り、カタログが出版され、内外の研究者に配分され始めている。

隕石は前述のように科学的価値の高い貴重な地球外物質であるため、その保存に際してはあらゆる意味での汚染防止に細心の注意が必要である。同時に遠い将来における研究にも提供されるべく十分留意しなければならない。南極隕石が再生不能の人類共通の資源である点を認識せねばならない。保存配分に伴うこれらの配慮は多数隕石を保有する研究機関および研究者の国際的義務ともいえる。

国立極地研究所は極地における種々の研究の体制を整えており現に多数のやまと隕石試料は極地というつねに危険を伴う状況において南極観測隊の努力によって採集され持ち帰られたものである。しかし、その設立時においては南極において大量の隕石が発見されようとは何人も夢想だにできなかった。極地研究所は本来極地における多くの分野の科学研究にかかわっており、その体制は隕石の回収、整理、保存などやそのための研究連絡に直ちに対応できるものではないにもかかわらず関係者の尽力により最近南極隕石についての事情はかなりの改善を見た。まことによろこばしいことであり、関係者には深く謝意を表したい。しかしながらその様な臨時的な措置には限界がある。

隕石の保存、切断、同定、内外への配分、カタログの作成、統計、分析、測定、等々、最少限に必要な仕事量は既に膨大なものであり、しかも隕石試料を最も学問的に有効に生かすには配分関係者自体隕石科学において一流の研究者でなければならない。之等に対する体制はいまだに非常に不備であることは否めない。

IV. 我が国における隕石科学の将来

一般に隕石科学、宇宙科学、惑星科学等の研究体制は欧州において古い伝統があり、米国ではアポロ計画の進展に伴い1960年代から特に著しい変化をきたした。アポロ計画推進のため多額の研究費が大学、研究所に支出され、地質学教室等は内容を一新、「地球および惑星科学教室」等と名称を改め研究施設も一段と充実してきた。

米国における最新の隕石処理法は、このような隕石科学、惑星科学研究者の長い経験と強い要望により確立されたものであって、米国航空宇宙局のきびしい予算削減にもかかわらずその施設と人員が提供されているのは隕石科学の重要性が十分に認識されているからであり、単に月試料施設の流用というものではない。

他方南極隕石の発見以前の我が国においては、前述の通りでありわずかに海外で隕石研究にたずさわった少数の者が隕石研究の灯をひきついできたにすぎなかった。現に、隕石科学又は惑星科学をタイトルにもつ講座、研究室は日本には皆無である。

最近是我が国においても惑星科学連合の設立にもみられるように、多くの若手研究者が惑星科学の研究をめざしている。広く隕石科学を基体とする惑星科学研究教育の場を作ること、南極隕石研究施設を作ることと同時に必要である。隕石科学は他の宇宙科学と密に関連があることを認識し、諸外国との国際交流の面に留意し、今後日本が行う惑星探査を目標とする研究所等との関連を考慮して、その振興をはかるべきである。

V. 具体的な振興策

(I A) 「南極隕石研究センター(仮称)」の設置

豊富な研究試料を中心とする全国共同利用の研究機関として緊急に設置する。(3年計画)

研究部門:(研究分野) 1. 探査(現地における回収・集積機構・極地研と協同)、2. 記載・分類(分類・記載)、3. 化学・測定(固有成分化学分析、ルーチン同位体分析、年代測定)、4. 客員部門(外国人を含む短・長期滞在外来研究員)、5. 試料室(試料・資料の国際交流・保管・配布)

人員:教授5 助教授3 助手9 技官8 事務官5 計30名

主要設備:試料保存庫一(冷凍室、真空容器、恒温乾燥室)、試料処理室一(不活性雰囲気中機械処理、クリーンルーム汚染防止処理) 鉱物分理等一(磁性分離、比重分理、切断)、光学測定一(薄片作成、顕微鏡写真、分析電顕)、物性測定一(磁性測定等) X線測定一(強力X線廻析、EPMA、X線蛍光分析)、化学分析室一(原子吸光分析等)、(中性子放射化分析室)一(多重波高分析器、放射能測定一ガンマ検出器)、(希ガス)質量分析室一(質量分析計)。経費 合計565,000千円

建物等:研究部門基本面積560㎡、試料保存庫、試料処理室、X線室、化学分析室、放射能測定及中性子放射化分析室(RI室設備)、質量分析室、試料室、図書室、客員宿舎、センター事務室、会議室、講義室、工作室、倉庫、電算室の合計面積960㎡

建築経費:(200千円/㎡) 304,000千円

(I B) 「隕石科学研究センター(仮称)」の設置

隕石試料による宇宙科学の技術開発を重点とする研究機関として設置する。(5年計画)

研究部門(構成員は上記に準ずる)(研究分野)

1. 隕石科学(隕石分類法開発等)、2. 固体惑星物質科学(隕石物性測定法開発等)、3. 隕石同位体科学(隕石構成固有成分及同位体測定法開発)、4. 客員部門(長期滞在研究員)、5. 資料室、6. 共通施設(保存室、RI等)。

主要設備として更に物性実験装置、加速器、真空実験室等の大型の機器を共同利用の目的で導入する。

建物等は上記に準ずる。

(II) 隕石科学研究教育機関としての国立大学学部講座または大学院課程及び研究施設の新設

隕石一般(月面物質、宇宙塵を含む地球外物質)を研究材料として行なう諸科学。大学の自主性を尊重すると共に、1. 基礎諸科学の充実した大学、2. 惑星科学等を志向する地学系学科内に学際領域の講座または研究施設として設置されるものとする。

講座名:(内容)

1. 隕石科学(原始物質の生成、コンドライト・エコンドライト等の分類・元素存在度、隕石の形成、冷却史等の研究)

2. 固体惑星物質科学(固体惑星の物質の科学、地球外物質による惑星・衛星物質の形成と進化の研究)

研究施設名:

1. 隕石科学研究施設(地球外物質一般の諸科学研究) 尚、密接に関連する講座としては更に下記のものが考慮される。

宇宙化学、隕石鉱物学、隕石物理化学、宇宙年代学(太陽系年代、同位体異常)、隕石生(物)化学(生体物質)、宇宙核化学(宇宙核現象)。(本田 雅健)

4th International Symposium on Water-Rock Interaction (WRI-4) の日本開催について

このことに関する最初のシンポジウムはDr. T. Pacesらの努力によって1974年ブラハ(チェコスロバキア)で開かれて好評を博し、以後3年毎にストラスブール(フランス)、エドモントン(カナダ)の順に開かれてきました。

WRI-1以来日本開催の強い要望が多く参加者から関陽太郎(埼玉大・工)らを通して日本側に伝えられていましたが、1980年7月カナダのWRI-3総会において1983年のWRI-4は酒井 均(岡山山・温研)を責任者として日本で開催することになりました。これをうけて北野 康(名大・水研)、関陽太郎、松尾慎士(東工大・理)、酒井 均、大木靖衛(神奈川温研)、神谷 宏(名工大)らは準備委員会を開き、WRI-4を1983年7月下旬三朝温泉で開催するのが適当であると結論をえしました。

このシンポジウムはIAGCのHydrogeochemistry部門(President: Prof. M. G. Valyashko)で水と岩石の相互作用に関心をもつSubgroupが開いてきたものであり、次の10項目にわたる研究発表および討論が行なわれてきました。

SUBGROUP ON WATER-ROCK INTERACTION
Chairman: B. Hitchon (Canada)

Vice-Chairman and Secretary for

International Cooperation:

T. Paces (Czechoslovakia)

INTEREST GROUPS

ON WATER-ROCK INTERACTION

1. Dilute water-rock interaction

Chairman: E. Mazor (Israel)

2. Diagenetic reactions, saline environments

Chairman: M. W. Edmunds (United Kingdom)

三宅泰雄会員、総会の満場一致で名誉会員に
1980年度総会において、三宅泰雄会員が本学会の
発展・地球化学の進歩に果された長年の功績にも
とずき、同会員を本会名誉会員とすることが評議
員会から提案され、満場一致で承認された。

3. Metamorphic environments
Chairman: Y. Seki (Japan)
4. Magmatic environments
Chairman: S. I. Naboko (U. S. S. R.)
5. Active geothermal systems
Chairman: A. J. Ellis (New Zealand)
6. Experimental water-rock reactions
Chairman: R. O. Fournier (U. S. A.)
7. Thermodynamic and computer approaches
Chairman: A. M. Truesdell (U. S. A.)
8. Reaction rates and kinetics
Chairman: R. M. Garrels (U. S. A.)
9. Membrane phenomena
Chairman: Y. K. Kharaka (U. S. A.)
10. Solution-mineral interaction in soil genesis
Chairman: J. M. Verstraten (The Netherlands)

なお、WRI-1の運営方法の細目は未定ですが日本地球化学会主催、関連学会共催となります。

第5回

地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議
Fifth International Conference
on Geochronology, Cosmochronology
and Isotope Geology

日本地球化学会,
日本地質学会主催,
IUGS Subcommittee on Geochronology,
International Association of Geochemistry and
Cosmochemistry,
International Association of Volcanology and
Chemistry of the Earth's Interior (IUGG),
The Geochemical Society 共催

表記の会議が1982年6月27日から7月2日まで、日本(日光)で開催されます。1978年8月に米国コロラド州スノーマスで開催された第4回の会議に続くもので、その性格・内容の一端は地球化学会ニュース86号に掲載された報告(松尾・柴田)に紹介されています。第5回会議の組織委員会(代表:本田雅健 委員:木

越邦彦, 松尾禎士, 小嶋 稔, 柴田 賢, 鳥居鉄也)が準備した First Circular は次のような内容となっています。

日程 6月27日~7月2日

会場 日光金谷ホテル

二会場の予定で表題の三つの区分けによる研究発表が行われますが、今回はとくに短いタイムスケールの年代学と新しい手法に関するシンポジウムが盛込まれます。前回同様トピックスを公募するほか、小規模のグループ討論又は workshops の申込みも受け付けます。

会議終了後次の Field Trips が行われる予定です。

(1) 本州中部: 名古屋から富山へ領家及び飛騨変成帯の岩石、中生代ケイ長質火山岩を中心としたバス旅行、6日間。

(2) 伊豆一箱根及び富士: 各種の若い火山岩、地熱活動を中心とした4日間のバス旅行。

予想される費用:

参加登録費 US \$ 100

宿泊費(食費を含む) US \$ 50~US \$ 75 per day

Field Trips: (1) US \$ 550

(2) US \$ 400

◎ First Circular を御希望の方は下記宛にお申込み下さい。

305 茨城県筑波郡谷田部町東1丁目1-3

工業技術院地質調査所

柴田 賢

なお、Second Circular は1981年秋に予定されており、First Circular に添付のカードを返送された方に送付されます。

編集者 佐藤和郎

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会センタービル(4F) 日本学会

事務センター内

電話 東京 03(815)1903

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920-833

三宅泰雄会員、総会の満場一致で名誉会員に
1980年度総会において、三宅泰雄会員が本学会の
発展・地球化学の進歩に果された長年の功績にも
とずき、同会員を本会名誉会員とすることが評議
員会から提案され、満場一致で承認された。

3. Metamorphic environments
Chairman: Y. Seki (Japan)
 4. Magmatic environments
Chairman: S. I. Naboko (U. S. S. R.)
 5. Active geothermal systems
Chairman: A. J. Ellis (New Zealand)
 6. Experimental water-rock reactions
Chairman: R. O. Fournier (U. S. A.)
 7. Thermodynamic and computer approaches
Chairman: A. M. Truesdell (U. S. A.)
 8. Reaction rates and kinetics
Chairman: R. M. Garrels (U. S. A.)
 9. Membrane phenomena
Chairman: Y. K. Kharaka (U. S. A.)
 10. Solution-mineral interaction in soil genesis
Chairman: J. M. Verstraten (The Netherlands)
- なお、WRI-1の運営方法の細目は未定ですが日本地球化学会主催、関連学会共催となります。

第5回

地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議
Fifth International Conference
on Geochronology, Cosmochronology
and Isotope Geology

日本地球化学会、
日本地質学会主催、
IUGS Subcommission on Geochronology,
International Association of Geochemistry and
Cosmochemistry,
International Association of Volcanology and
Chemistry of the Earth's Interior (IUGG),
The Geochemical Society 共催

表記の会議が1982年6月27日から7月2日まで、日本（日光）で開催されます。1978年8月に米国コロラド州スノーマスで開催された第4回の会議に続くもので、その性格・内容の一端は地球化学会ニュース86号に掲載された報告（松尾・柴田）に紹介されています。第5回会議の組織委員会（代表：本田雅健 委員：木

越邦彦、松尾禎士、小嶋 稔、柴田 賢、鳥居鉄也）が準備した First Circular は次のような内容となっています。

日程 6月27日～7月2日

会場 日光金谷ホテル

二会場の予定で表題の三つの区分けによる研究発表が行われますが、今回はとくに短いタイムスケールの年代学と新しい手法に関するシンポジウムが盛り込まれます。前回同様トピックスを公募するほか、小規模のグループ討論又は workshops の申込みも受け付けます。会議終了後次の Field Trips が行われる予定です。

(1) 本州中部：名古屋から富山へ領家及び飛騨変成帯の岩石、中生代ケイ長質火山岩を中心としたバス旅行、6日間。

(2) 伊豆一箱根及び富士：各種の若い火山岩、地熱活動を中心とした4日間のバス旅行。

予想される費用：

参加登録費 US \$ 100

宿泊費（食費を含む） US \$ 50～US \$ 75 per day

Field Trips: (1) US \$ 550

(2) US \$ 400

◎ First Circular を御希望の方は下記宛にお申込み下さい。

305 茨城県筑波郡谷田部町東1丁目1-3

工業技術院地質調査所

柴田 賢

なお、Second Circular は1981年秋に予定されており、First Circular に添付のカードを返送された方に送付されます。

編集者 佐藤和郎

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会センタービル（4F） 日本学会

事務センター内

電話 東京 03 (815) 1903

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 92

1981. V. 8

選挙公示

日本地球化学会1982・1983年度役員選挙の

立候補者および推薦候補者の届出について

1981年5月1日

日本地球化学会役員選挙管理委員会

本会会則により1982・1983年度役員の選挙を次の日程で行ないます。

立候補者・推薦候補者締切 7月31日（必着）

選挙公報・投票用紙・会員名簿発送

8月25日

投票締切 9月30日（必着）

選挙結果公表（総会） 10月11日

つきましては、下記により、会長・副会長・評議員に対してそれぞれ立候補者および推薦候補者の届出をしていただくようお願いします。

1. 会長1名、副会長1名、評議員20名を選出します。
2. 立候補者の届出は、届書を立候補者自身が、I）本委員会に持参するか、またはII）本委員会宛に送付して下さい。

3. 推薦候補者の届出は、推薦候補者名と推薦者名を記した届書に、推薦候補者の承諾書をそえて、推薦者またはその代表者がI）本委員会に持参するか、またはII）本委員会宛に送付して下さい。なお役員選出細則第8条により次の方は次期評議員に選出することができません：石渡良志、金森 悟、佐藤和郎、柴田 賢、樽谷俊和、中井信之、長沢 宏、坂野昇平、不破敬一郎、松尾禎士、八木健三、綿拔邦彦。

4. 第2項と第3項に記した以外の方法で届出が行なわれた場合には、届書をうけつけることができません。郵送の場合は、「書留郵便」として下さい。届書の封筒の表に（選挙）と記入して下さい。

5. 届出の締切は、1981年7月31日（必着）です。

6. 本委員会の所在地は次の通りです。

東京都文京区本郷7-3-1（〒113）

東京大学理学部化学教室 不破敬一郎

1981年度 日本地球化学会年会

1981年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

期日 10月10日(土)、11日(日)、12日(月)

会場 東海大学海洋学部(清水市折戸 1,000)

内容 一般講演、課題講演および特別講演。課題講演には次の三つが計画されています。(1)「水中の微量重金属元素の化学」コンビーナーとして坪田博行・豊田恵聖氏が予定されています。天然水中の重金属元素についての諸問題に対し、分析化学、溶液化学および錯体化学などの立場からパネル討論を行なう予定で、司会者およびパネラーは現在交渉中です。(2)「堆積物による環境変動の復元」は松本英二・増沢敏行氏がコンビーナーとして、湖底、海底、炭酸塩および雪氷などの堆積物質中に記録されている現在より数万年前までの環境変動に関する課題をまとめ討論します。また、堆積年代決定および堆積後の続成変化などの問題も含んでいます。(3)「地熱エネルギーと地球化学」は中井信之・古賀昭人・茂野 博氏のコンビーナーが火山ガス、火山噴出物および熱鉱泉水などの地熱作用に由来する諸現象についての問題をまとめ議論します。勿論この部門においては安定および放射性同位体の挙動は重要な課題であります。

特別講演として「地殻内の地熱エネルギーのいとなみ—特に地震・火山との関係—(東海大海洋、早川正己氏)」をお願いしています。

講演申込締切 6月27日(土)

講演要旨提出締切 8月15日(土)

申込受付次第、オフセット用原稿用紙をお送り致します。

懇親会 10月11日(日)18時から三保文化ランド(清水市三保、電話0543-34-7711)にて。

会費 4,000円(学生 2,000円)

参加、要旨集および懇親会申込締切 9月5日(土)

以上の申込みは必ず所定の申込用紙(多数必要な方はコピーでも可)を用いて下さい。参加費は不用です。要旨集代金 3,000円(学生 2,000円)(郵送料を含む)、懇親会費は上記申込期日までに、銀行振込(駿河銀行清水港支店、普通:603648、日本地球化学会年会)または郵便振替(東京-9-155798、東海大学海洋学部、岡部史郎)にて御送金下さい。要旨集代金は予約申込みのないときは 3,300円となります。

申込先 〒424 清水市折戸 1,000 東海大学海洋学部内 1981年度日本地球化学会実行委員会 岡部史郎

(もしくは豊田恵聖)(電話:0543-34-0411、内線300または251)

交通 東海道線清水駅から三保文化ランド、三保車庫、または三保灯台行きで東海大学前下車約30分、タクシーならば約20分。

宿泊 (株)日本交通公社静岡支店(〒420 静岡市御幸町5番地、電話:0542-51-2398、日本地球化学会年会担当、中野・吉田)でお世話いたします。宿泊地は静岡駅前と清水市内に手配することです。同封の別紙用紙に御記入のうえ上記支店へ直接申込み下さい。

地球化学会会員名簿改訂についてお願い

新名簿発行のため、勤務先および住所変更の方は、至急、下記宛にご連絡下さい。

〒227 横浜市緑区長津田町4259

東京工業大学総合理工学研究科

一國雅巳

電話 045-984-1111

1980年度第3回評議員会報告

と き:1980年10月5日(日)

ところ:鹿児島市グリーンホテル錦生館

出席者:木越会長、北野副会長、石渡、一國、金森、鎌田、桑本、酒井、佐藤、杉村、樽谷、中井、不破、松尾、松本、綿拔 各評議員、鳥居監事、高野(オブザーバー)

報告

1. 日本学術会議関係

Post-GDPシンポジウム(正式名 Lithosphere)が9月末に学術会議において開催された。第5回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議の学術会議後援が決定した。

2. 各委員会関係

庶務:第17回理工学における同位元素研究発表会が6月30日~7月2日に開催された。

編集:増田 G.J. 編集委員長が静養中であるので、松尾編集担当評議員が G.J. 編集委員長の職務を代行中である。

行事:次期年会開催地について各方面と折衝した。

ニュース:年会プログラム号として No. 90 を発行した。No. 91 は年内に発行の予定である。

3. 幹事会関係

第2回幹事会を9月6日14時から学習院大学で開催した。東大アイソトープセンターの森岡正名氏にニュース編集委員を委嘱した。Post-GDP に関する本会の窓口を松尾評議員とすることを決定した。

議事

1. 第18回理工学における同位元素研究発表会の共催について

標記研究発表会の共催を承認した。

2. 2月例会について

実施の内容については幹事会に一任した。

3. 入退会について

1980年8月末までの正会員の入会は18名、退会は4名であった。この結果8月末現在の会員数は正会員816名、賛助会員15名、名誉会員3名、計834名となった。

4. 会則検討特別委員会の設置について

会長等の任期を検討するため、北野副会長、一國、松尾、金森 各評議員からなる特別委員会を発足させることにした。

5. 総会次第案について

原案を一部修正の上承認した。

6. 1979年度事業および会計報告について

原案について審議し、これを承認した。

7. 1980年度事業および会計中間報告について

原案について審議し、一部修正の上承認した。

8. 1981年度事業計画および予算案について

原案について審議し、一部修正の上承認した。

9. 次期年会開催地について

次期年会を東海大学海洋学部で行うことを決定した。

10. 第4回水・岩石相互作用国際シンポジウムについて

1983年に開催される同シンポジウムを本会が主催することを決定した。

11. 水熱反応国際会議の後援について

同会議の後援を決定した。

IGCP 73/1/24 "Quaternary Glaciations in the Northern Hemisphere" 第8回国際研究集会

堀江正治(京都大学理学部教授)主催

国際陸水学会、国際第四紀学会 共催

日本地球化学会、日本陸水学会、日本地理学会、日本地質学会、日本第四紀学会、日本地球電気磁気学会、

日本生態学会 後援

日程

1981年7月28日~31日:京都大学における Session

(うち1日は京大理学部琵琶湖古環境実験施設、琵琶湖200mコア、1000mコアおよび古琵琶湖層の見学)

8月2日~5日:信州梓川溪谷、白馬北股、立山山崎カールへの見学旅行

8月11日~20日:日高山地付近のカールの踏査

開催の目的 本集会は、地質時代より今日、未来にまたがる時間のなかで日本の山地などに大気からもたらされた水や氷雪がどのようにして氷河となり、氷蝕の威力をどの位の範囲にまで発輝してきたのか、いかにして気候が変化したのか、またその原因は何か、などの問題を日本列島を中心に地球規模で討論することを目的とする。これまでは欧米諸国の年代学的標準にだけ頼ってきたのがアジアの氷河地質学的研究であったが、今回の集会では従来の研究成果を根本的に見直し、琵琶湖底掘削試料の解析結果とともに世界の新しい第四紀学を確立しようとするものである。

上記集会に参加ご希望の方は、堀江正治教授(〒520-11 滋賀県高島郡高島町 京都大学理学部琵琶湖古環境実験施設)までご連絡下さい。

水熱反応国際会議

水熱反応国際会議組織委員会 主催

日本学術振興会 後援

日程 1982年3月22日~26日

会場 東京工業大学長津田キャンパス総合研究館

主題 高温高压下の水の挙動、高温高压下の溶液の挙動、水熱合成・結晶成長・水熱化学反応、熱水による侵蝕、地熱発電に関係のある地熱水

上記会議に参加ご希望の方は宗宮重行教授(〒227 横浜市緑区長津田町4259 東京工業大学工業材料研究所)までご連絡下さい。なお予備登録は7月15日まで、要旨締切は10月15日です。

書評 海洋化学入門(東京大学出版会、pp. 217, 1981)

新妻信明 訳

Wallace S. Broecker: Chemical Oceanography, Harcourt Brace Jovanovich, Inc. pp. 214, 1974 の訳本である。著者の Broecker 教授(Columbia Univ. & Lamont-Doherty Geological Observatory)は、現代の海洋化学の分野では国際的にみて最も強い影響力をもつ1人である。本書の原稿は学部学生用の講義の録音テープから作られたものである。従って大変わ

かりやすく話が進められている。しかしあくまでも彼自身の研究室で若い大学院の学生らと蓄積してきた新鮮なすばらしい研究成果を中心に書かれており、その点本書は文句なしに魅力的である。本書の内容は次の章にわかれている：海洋内循環、堆積物中の記録、海洋循環の速度、マンガンノジュールの謎、溶存気体、水塊トレーサーとしての同位体、時間的变化 — 過去と未来。それらの原著の英語表現は海洋化学という文字に何やら夢を呼びよせる書きぶりである。

さて、訳書だが、心を配り、気を使って訳されていることが一読してよくわかる。日本文としてスラスラ読み流せるのが何より有難い。その努力には頭がさがる。Broecker 教授の頭脳の動き、海に対する彼のハートをつかみとることが海洋の化学を研究する者には大変有用であるという点を考えると、この訳書の出版は喜ばしい限りである。たゞ、この本から素朴な意味で海洋の化学の勉強をしようとする者にとっては、この訳書に対しては文句をつけたいことがいくつかある。まず感ずることは、この訳者は化学には疎い人だと感ぜざるをえない。化学を学んだ私は、この訳書の一変てこな表現に出くわすと、英語を思いうかべて、ハハンと思うことが大変屢あった。紙面の都合でほんの2つだけ示すことにする。“表層水の塩に含まれるカルシウムの量(P. 9)” “硝酸塩やリン酸塩がケイ酸塩に比較して一般に非常に浅い所で溶解する … (P. 51)”。前者では塩という表現にひっかかるし、後者は原文とも違うし、誤解されやすい訳である。また、P. 21(下から2行目)の50, P. 22 の表1-4のCaの49.5、50.0という数字は訳者が意識的に原著の数字を変えたように推理されるが、これは言語道断である。

たゞ原著における数値の誤まりなどには、何らかの形でふれる配慮を望みたい。意地悪いことを言ったようだが、訳者の努力を高く評価し、この訳書の出版をよろこんでいるが故の発言であることを御了解頂きたい。

(北 野 康)

編集者 佐藤和郎・森岡正名

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会センタービル(4F) 日本学会

事務センター内

電話 東京 03(815)1903

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920-833

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 93

1981. VIII. 1

1981年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会
共催 日本化学会
日時 1981年10月10日(土)～10月12日(月)
会場 東海大学海洋学部
静岡県清水市折戸 1,000
(連絡先 東海大学海洋学部海洋科学科 岡部史郎)
Tel 0543-34-0411 内線300

	会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17
10日 (土)	A		一 般 講 演				一 般 講 演			
	B		一 般 講 演				一 般 講 演			
	C		一 般 講 演				一 般 講 演			
	D		一 般 講 演				一 般 講 演			
11日 (日)	A		一 般 講 演				一 般 講 演		総 会	特 別 講 演
	B		課題講演Ⅲ (地熱エネルギーと地球化学)				課題講演Ⅰ (水中の微量重金属) パネル討論			
	C		一 般 講 演				一 般 講 演			
	D		一 般 講 演				一 般 講 演			
	A		課題講演Ⅱ (堆積物による環境復元)				課題講演Ⅱ (つづき)			
	B		一 般 講 演				一 般 講 演			
	C		一 般 講 演				一 般 講 演			

懇親会：10月11日(日)18時から三保文化ランド
講演時間：一般講演は討論を含めて15分を予定しています。
課題講演は討論を含めて20分の予定です。時間厳守に御協力下さい。

第1日 10月10日(土)

A会場

一般講演(9:00~12:00)

座長 小沼直樹、木越邦彦、兼岡一郎、佐藤和郎

1 A01 原始太陽雲中の炭素質物質の形成(電通大)
・坂田 朗・和田節子・(東大)中田好一・
(電通大)奥津佳之

1 A02 Sr/Ca-Ba/Ca ダイアグラムにおける隕石母
天体、月、地球(茨大理)小沼直樹

1 A03 Yamto-74035 および-75028 隕石の希ガ
ス同位体分析(山形大理)。高岡宣雄・斎藤
和男・(岡山理科大)長尾敬介

1 A04 テキサスおよびジョージアのテクタイトと同
年代の海底土コア中のマイクロテクタイトの希
土類元素含有量の比較(学習院大理)。長沢
宏・福岡孝昭・(Univ. of Delaware)
B. P. Glass

1 A05 本邦に落下した鉄いん石中の微量元素(科博)
・島 正子・(理研)矢吹貞代・木村 喬・
矢吹英雄

1 A06 ALH 77302 ユークライトの化学組成(学習
院大理)福岡孝昭

1 A07 多成分硫酸塩メルトからの蒸発一実験と理論
; 隕石への適用(名大理地球科学)。橋元明
彦・熊沢峰夫

1 A08 希土類元素と主成分元素からみたKapoeta
隕石(howardite)の成因について(神戸大
理)馬越由美・増田彰正

1 A09 希ガス用質量分析計の製作と火山、温泉ガスの
希ガス組成(岡山理大)。長尾敬介・緒方惟一

1 A10 希ガス同位体とマントルの地球化学的構造(東
大理)兼岡一郎

1 A11 重力の下での気体中の熱平衡(学習院大理)
木越邦彦

一般講演(13:00~17:00)

座長 小沼直樹、木越邦彦、兼岡一郎、佐藤和郎

1 A12 島弧火山岩の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr(東北日本)(筑波
大)野津憲治

1 A13 島弧火山岩の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr(伊豆諸島)(筑波
大)。野津憲治・平野真孝・(地調)一色直記

1 A14 島弧火山岩の酸素同位体組成(地質調査所)
松久幸敬

1 A15 火山ガラス中の微量元素含有量による火山灰
層の同定(学習院大理)。福岡孝昭・鈴木一
行・猪股昭博・西川一也

1 A16 神鍋火山群のストロンチウム同位体組成(九
大理)窪田洋司

1 A17 酸性火成岩類中の希土類元素存在度について
(神戸大教養)。寺門靖高・(東大理)増田
彰正

1 A18 質量分析計によるモノアイソトピックな希土
類元素(Ho)の定量(神戸大理)。川上紀
(東大理)増田彰正

1 A19 鉛同位体比から見た日本の鉱床生成期(東大
震研)。佐藤和郎・(地調)佐々木 昭・
(アルバータ大)G. L. Cumming

1 A20 熱水脈における酸素および炭素同位体分別—
串木野鉱床の例—(地質調査所)。松久幸敬・
森下祐一

1 A21 鉛同位体比による断層の年代推定の試み(神
戸大理)。杉野和彦・増田彰正

B会場

一般講演(9:00~12:00)

座長 大西富雄、酒井 均、水谷義彦、小坂丈予

1 B01 ガスクロマトグラフ法による温泉ガスの分析
(東大理)。ト部明子・富永 健・中村裕二・
脇田 宏

1 B02 水銀を指示元素とする化学的噴火予知(九大
温研)古賀昭人

1 B03 兵庫県東部に分布する温・鉱床に伴うガス成
分について(大阪市立大)。益田晴恵・鶴巻
道二

1 B04 火山ガス中の微量成分と火山活動(鹿児島大
教養・理)。大西富雄・鎌田政明

1 B05 妙高山南地獄谷噴気ガス中の水銀について
(新潟県公害研)。福岡紀夫・富永泰子・(新
潟県公害規制課)貴船育英

1 B06 口永良部島火山および温泉の地球化学(東工
大)。平林順一・(岡大温研)酒井 均・(東
工大)小坂丈予

1 B07 四重極質量分析計による温泉遊離ガス中の希
ガスの分析(東大理)。佐野有司・富永 健・
中村裕二・脇田 宏

1 B08 東北日本の火山性水素および水素化合物の水
素同位体比(名大理)。清棲保弘・倉橋 誠

1 B09 県内地熱地帯における鉱泉中の²²²Rn、²²⁶Ra
含量について(秋田県衛生科学研)。武藤倫
子・高橋 守・勝又貞一

1 B10 黒部峡谷の温泉水の同位体および化学組成(富
山大理)。水谷義彦・日下部 実・木下 智

1 B11 木曽御岳火山のその後の活動状況(東工大)
・小坂丈予・平林順一・(埼玉大工)小沢竹
二郎

一般講演(13:00~17:00)

座長 大西富雄、酒井 均、水谷義彦、小坂丈予

1 B12 秋田県玉川温泉の地球化学的研究(続報)(東
邦大理)。吉池雄蔵・岡村 忍・岩崎岩次

1 B13 長野県内村川沿いの温泉と地質(中央温泉研)
佐藤幸二

1 B14 濃度相関マトリックス法による山形県の温泉
の研究I蔵王及び赤倉温泉(山形大理)。入
江敏勝・高橋章司

1 B15 下賀茂温泉について(中央温泉研)。田中
昭・甘露寺泰雄・佐藤幸二

1 B16 溶出、吸着実験による食塩泉のリチウムにつ
いての考察(東邦大)。高松信樹・下平京子
今橋正征・(名工大)神谷 宏

1 B17 リチウム含量と酸素水素同位体組成からみた
食塩泉の起源(東邦大)高松信樹・下平京子
・今橋正征・(岡山大温研)堤 真・(名工
大)神谷 宏

1 B18 伊豆諸島および東伊豆単成火山群の地球化学
(筑波大化)平野真孝

1 B19 硫酸水溶液と過剰の火山岩の反応(4)(東工大
理)吉田 稔

1 B20 火山性酸性泉におけるS化合物のイオウ同位
体比について(名大理)。倉橋 誠・清棲保
弘・中井信之

1 B21 火山性天然硫黄中の微量元素の定量(日女大)
・蟻川芳子・(武蔵工大原研)平井昭司・
(埼玉大工)小沢竹二郎

1 B22 東伊豆単成火山群におけるSr/Ca-Ba/Ca
システムテックス(筑波大化)平野真孝・
(外務省)葉室和親・(茨大理)。小沼直樹

1 B23 伊豆諸島火山群におけるSr/Ca-Ba/Ca シ
ステムテックス(茨大理)小沼直樹・(筑波
大化)。平野真孝・(地調)一色直記

1 B24 福井県東部接触鉱床地域の地質と水質(玉野
技研)。浅井和見・木下 貴

1 B25 イオン交換ロ紙による接触鉱床地域の地化学
探査(玉野技研)浅井和見・木下 貴

1 B26 黒鉱鉱床の鉱石及び関連試料中の希土類元素
(神戸大理)堂本幸輝・増田彰正

1 B27 王滝川(木曽御岳)の河川堆積物中の重金属
元素の存在状態(名大水圏研)。富山千里・
藤吉亮子・北野 康

C会場

一般講演(9:00~12:00)

座長 和田英太郎、石渡良志、中谷 周、綿抜邦彦

1 C01 新庄油田地域堆積岩中の炭化水素、アルコー
ル、脂肪酸、ヒドロキシ酸(都立大理)。塩
谷 真・石渡良志

1 C02 自然物質中の元素分布における海水の重要性
(京教大)。山本俊夫・青山一正・三輪吉和
岡本健一

1 C03 松林内大気中モノテルペン濃度の変動(国立
公害研)。横内陽子・安部喜也・不破敬一郎
(東邦大理)岡庭光重

1 C04 大槌川水系における生元素の挙動(三菱化成
生命研)。和田英太郎・南川雅男・水谷 廣
辻 堯・今泉励子・柄沢享子

1 C05 榛名湖における水中有機物の初期続成作用—
I—脂質成分(都立大)。小椋和子・落合正
宏・河村公隆・福島和夫・塩谷 真・山本修
一・石渡良志

1 C06 榛名湖における水中有機物の初期続成作用—
II—炭水化合物、アミノ酸(都立大)。落合正
宏・小椋和子・河村公隆・福島和夫・塩谷真
山本修一・石渡良志

1 C07 三河湾における新生堆積物について(愛知公
害センター)佐野方昂

1 C08 分解実験による新生沈殿物の有機物変化(名
大水圏研)。松枝秀和・半田暢彦

1 C09 室内実験による有機物の初期続成過程解析の
試み(都立大理)福島和夫

1 C10 植物プランクトンの光合成による有機物の
turnover(名大水圏研)。浜 健夫・半田暢彦

1 C11 天然水中の溶存金属酵素アルカリホスファター
ゼ(東大理)。小林憲正・藤原祺多夫・原口
紘丞・不破敬一郎

1 C12 天然水中の溶存ナイトレートリダクターゼの
分布と同定(東大理)岸部和美・藤原祺多
夫・小林憲正・原口紘丞・不破敬一郎

一般講演(13:00~17:00)

座長 和田英太郎、石渡良志、中谷 周、綿抜邦彦

1 C13 堆積物中のB—ヒドロキシ酸の存在状態につ
いて(都立大理)。河村公隆・石渡良志

1 C14 堆積高分子有機物(Geopolymer)の形成過
程、II:非酵素的褐変反応(Mailland
Reaction)の役割と速度論的評価(都立大理)
・山本修一・石渡良志

1 C15 Kerogen 中のカロチノイド色素に関する知
見(都立大理)。町原 勉・石渡良志

1 C16 榛名湖堆積物中の炭水化合物の特徴(都立大理)
・鶴崎 実・石渡良志

1 C17 堆積物中の脂肪酸の定量法、特に加水分解条

- 件の検討(都立大理)。内藤康司・石渡良志
- 1 C18 湖底堆積物表層部内における炭素と窒素の微生物学的挙動(愛知学院大教養) 小山忠四郎
- 1 C19 ^{15}N トレーサーを用いた土壌・堆積物の N_2O 還元活性(東工大理)。吉田尚弘・山崎 岳松尾禎士
- 1 C20 生物学的窒素固定系での N_2O 還元の際の窒素同位体効果(東工大理)。山崎 岳・吉田尚弘・(三菱生命研) 和田英太郎・(東工大理) 松尾禎士
- 1 C21 動物の成長に伴う $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$ の変化- ^{210}Po によって年齢査定された二枚貝について-(三菱化成生命科学研)。南川雅男・柄沢享子 和田英太郎
- 1 C22 上部ライト谷に点在する湖沼の水質-南極塩湖の塩起因に関連して-(弘前大理)。中谷周・(都立大理) 松本源喜・(千葉工大) 鳥居鉄也
- 1 C23 南極塩湖の栄養塩分布と変動(弘前大理)。中谷 周・(都立大理) 松本源喜・(千葉工大) 鳥居鉄也
- 1 C24 南極塩湖における窒素同位体組成の変動(三菱化成生命研)。和田英太郎・今泉励子・(弘前大) 中谷 周・(千葉工大) 鳥居鉄也
- 1 C25 南極バンダ湖の微量元素の分布(北大水産)。増田宣泰・西村雅吉・(千葉工大) 鳥居鉄也
- 1 C26 南極ドンファン池の湖底堆積物中の重金属元素の分布と存在状態(名大水圏研)。富山千里・北野 康・(東大教養) 綿抜邦彦
- 1 C27 南極ドライバレー地域の湖沼堆積物中の有機成分(都立大理)。松本源喜・(千葉工大) 鳥居鉄也・(都立大理) 半谷高久

D 会場

一般講演(9:00~12:00)

- 座長 金森 悟・野崎義行・坪田博行・杉村行勇
- 1 D01 清水港における栄養塩の月別変化(清水市環境部)。福井 深・片平礼子・篠田礼子・(東海大海洋) 岡部史郎
- 1 D02 駿河湾の海水と懸濁物質中のVおよびMo(東海大海洋) 岡部史郎・佐藤義夫・関口忠司・山本一長
- 1 D03 北太平洋西部表面水及び大気中の二酸化炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比(気象研)。井上久幸・杉村行勇
- 1 D04 大気から海洋に移行した二酸化炭素量推定の試み(名大水研)。金森 悟・池上 尚

- 1 D05 太平洋深層の溶存酸素同位体比の解析(東大海洋研)。田尻耕治・堀部純男
- 1 D06 西部太平洋における表面水中の ^{226}Ra の顕著な緯度変化について(北大水産)。原田 晃角皆静男
- 1 D07 西部北太平洋におけるTh同位体の分布と挙動(東大海洋研)。野崎義行・堀部純男・(広大) 坪田博行
- 1 D08 沿岸水中の ^{210}Po , ^{210}Pb , ^{234}Th の分布とその解析(北大水産)。田中教幸・竹田洋一郎・角皆静男
- 1 D09 西部北太平洋における海底地形と底層水の循環(東大海洋研)。蒲生俊敬・堀部純男
- 1 D10 北西太平洋におけるカルシウムおよびアルカリ度の分布(名大水圏研)。池上 尚・金森 悟・北野 康
- 1 D11 海水中の窒素, リン濃度分布を規定している因子(地化協) 三宅泰雄・(長崎海洋気象台) 鷺 猛・(地化協) 猿橋勝子

一般講演(13:00~17:00)

- 座長 金森 悟・野崎義行・坪田博行・杉村行勇
- 1 D12 海洋におけるマンガンおよびアルミニウムの挙動(東海大海洋)。豊田恵聖・菊谷 彰・岡部史郎
- 1 D13 西部北太平洋の栄養塩と重金属の分布(広大総科)。坪田博行・太田憲良・児玉哲夫
- 1 D14 東京湾海水中の銅の存在量(東水大)。前田勝・宮原 司・高野正徳・牧嶋正身・山邨欣貴
- 1 D15 海水中のセレン, ヒ素, アンチモンの分布(気象研)。鈴木 款・杉村行勇・(地化協) 三宅泰雄
- 1 D16 海水中的水銀の含量と化学形(地化協) 三宅泰雄・(気象研)。鈴木 款・杉村行勇
- 1 D17 北太平洋西部海水中的有機形金属化合物の鉛直分布(気象研)。杉村行勇・鈴木 款
- 1 D18 配位子置換反応を用いた海水中的有機態金属錯体の安定度数の推定(気象研)。広瀬勝己土器屋由紀子・杉村行勇
- 1 D19 北太平洋西部海水中的アミノ酸の分布(気象研)。杉村行勇・鈴木 款
- 1 D20 海水の溶存炭水化合物の化学構造について(名大水圏研)。佐久川 弘・半田暢彦・太田啓一
- 1 D21 珪質堆積物とくにチャートの成因について(その1)(名大理)。杉崎隆一・山本綱志
- 1 D22 珪質堆積物とくにチャートの成因について(その2)(名大理)。山本綱志・杉崎隆一

- 1 D23 鉍脈性石英の流体包有物の同位体組成(東工大理)。風早康平・垣内正久・松尾禎士
- 1 D24 スペレオセム流体包有物の酸素同位体比(岡山大理)。山本雅弘・(Mc Master 大) H. P. Schwarcz
- 1 D25 岩塩中の流体包有物の抽出・分析法(東工大理)。堀田十輔・松尾禎士
- 1 D26 海水による岩石の変質について(東大理)。葉袋佳孝・富永 健・中村裕二・脇田 宏(東大海洋研) 石井輝秋

第2日 10月11日(日)

A 会場

一般講演(9:00~12:30)

- 座長 増田彰正・坂元隼雄・中島 進・合田四郎
- 2 A01 深海底堆積物の化学組成(東大理)。葉袋佳孝・富永 健・中村裕二・脇田 宏
- 2 A02 太平洋深海底堆積物中の希土類元素, 特にCeの相対存在度(神戸大理) 池田直隆・増田彰正
- 2 A03 深海堆積物中の炭酸塩団塊について(静大理)。和田秀樹・新妻信明・長沢敬之助・岡田博有
- 2 A04 鹿児島湾底質中のAs, Sb, Hgの分布とその特異性(鹿児島大理)。坂元隼雄・鎌田政明・(鹿児島大教養) 杉浦吉雄
- 2 A05 噴火湾底泥間隙水中のリン酸塩濃度の大きな周年変動について(北大水産)。渡辺康憲・角皆静男
- 2 A06 湖沼・海底堆積物中の硫黄と炭素含有量(地調)。寺島 滋・米谷 宏・井内美郎・松本英二
- 2 A07 新潟油ガス田における泥質岩中の硫黄含量(地調) 粕 武
- 2 A08 岡山県児島湖湖底堆積物中の元素の分別挙動(岡山大農生研)。中島 進・森井ふじ・青山 勲
- 2 A09 琵琶湖柱状堆積物中の重金属元素の分別挙動(岡山大農生研) 中島 進
- 2 A10 貯水池における重金属元素とリンの堆積(電力中研)。坂田昌弘・下田 修
- 2 A11 湖沼の化学状態から見た堆積環境(道公害研)。坂田康一・(東海大札幌) 石井次郎・(道公害研) 安藤和夫
- 2 A12 霞ヶ浦高浜入における間隙水組成変動と底泥からのリンの回帰(国立公害研)。河合崇欣 大槻 晃・相崎守弘・西川雅高

一般講演(13:00~15:00)

- 座長 増田彰正 坂元隼雄・中島 進・合田四郎
- 2 A13 底質中の重金属元素の迅速分析法(電力中研)。坂田昌弘・下田 修
- 2 A14 多元素水酸化物を担体とする微量成分の共沈殿(近畿大理工) 平木敬三・兼村郁雄・西川泰治
- 2 A15 粘土鉱物へのアニオンの吸着機構に関する研究(近畿大理工・教養) 合田四郎・山崎秀夫・平木敬三・西川泰治・重松恒信
- 2 A16 希塩酸により溶出される土壌無機成分と有機成分(足工大)。小林公子・小平 潔
- 2 A17 敦賀半島のビーチサンドの地球化学(奈良教大)。三辻利一・(金沢大理) 圓尾好宏

特別講演(16:00~17:00)

- 座長 北野 康
- 地殻内の地熱エネルギーのいとなみ-特に地震・火山との関係(東海大海洋) 早川正巳

B 会場

課題講演III 地熱エネルギーと地球化学

9:00~ コンビナー・座長

中井信之・古賀昭人・茂野 博

- 2 B01 濁川地熱地域における熱水の化学組成(日大重化学工業) 吉田 裕
- 2 B02 草津白根火山周辺熱水の化学的特徴(東大教養)。綿抜邦彦・高野穆一郎・斉藤佳子
- 2 B03 秋田焼山周辺の地熱水の水素及び酸素同位体比(秋田大鉱山)。松葉谷 治・北 逸郎
- 2 B04 B/C比による地熱貯留岩の推定(地調)。茂野 博・阿部喜久男
- 2 B05 地熱地帯の土壌ガスの特徴とその地熱探査への応用(地調) 野田徹郎
- 2 B06 有珠山周辺の温泉水の起源とその温度(東工大総合理工) 鶴見 実
- 2 B07 熱水溶液の水素フュガシティーの測定とその応用, 3.(岡山大温研)。木島宣明・酒井均
- 2 B08 熱拡散分離系における塩水中塩酸の挙動(佐賀大理工)。竹山尚賢・中島紀美枝
- 2 B09 熱拡散分離系における海水中ハロゲンイオンの濃縮(佐賀大理工)。中島紀美枝・竹山尚賢

B 会場

課題講演I 水中の微量重金属元素の化学

パネル討論

コンビナー 坪田博行・豊田恵聖

司会 (東工大理工) 大滝仁志
パネラー
(青山学院大理工) 平尾良光
(京大理) 中山英一郎
(北大水) 松永勝彦
(気象研) 鈴木 款

C 会場 (9:00~12:00)

一般講演

- 座長 金森暢子、奥村 稔、一國雅巳、兼島 清
- 2 C 01 炭酸カルシウムの結晶表面上へのリンの吸着平衡(新潟大理)。猪股茂博・鈴木俊雄・沢田 清
- 2 C 02 生物性炭酸塩殻の構造と化学組成Ⅱ(名大 wat 園研)北野 康・金森 悟・。金森暢子
- 2 C 03 秋吉石灰岩の化学組成(2)(九大理)。吉村和久・中川初子・樽谷俊和
- 2 C 04 炭酸カルシウムの結晶生成速度(新潟大理)。沢田 清・(ニューヨーク州大) G. H. ナンコラス
- 2 C 05 ナトリウムの方解石との共沈殿(東工大総合理工)。石川正道・一國雅巳
- 2 C 06 炭酸カルシウムによるフッ化物イオンの共沈殿—その共沈殿に及ぼす有機物の影響(島根大理)。奥村 稔・(名大 wat 園研)北野 康(島根大理)井戸垣正俊
- 2 C 07 炭酸カルシウムによる臭化物イオンの共沈殿(島根大理)。奥村 稔・(名大 wat 研)北野 康・(島根大理)井戸垣正俊
- 2 C 08 カルサイトドロマイト固溶体へのストロンチウムの共沈(琉球大理)。大出 茂・(名大 wat 園研)北野 康
- 2 C 09 沖縄本島産炭酸塩岩の微量重金属元素含量(群馬大工)。相沢省一・赤岩英夫
- 2 C 10 琉球諸島近海に産する造礁サンゴ中のプルトニウム(琉球大理)。瀬長真知子・兼島 清 平良初男
- 一般講演(13:00~15:00)
- 座長 金森暢子、奥村 稔、一國雅巳、兼島 清
- 2 C 11 石垣島川平湾における粒子状物質の化学組成(琉球大理)。大出 茂・内田 勝・比嘉辰雄 藤山虎也
- 2 C 12 サンゴ骨格中の微量元素の不均一分布について(琉球大理)。大森 保・兼島 清・(名大 wat 研)北野 康
- 2 C 13 サンゴ炭酸殻における少量元素の分布(名大 wat 園研)北野 康・。池野知子

- 2 C 14 生物性炭酸殻結晶の変質について(名大 wat 園研)北野 康・金森暢子・(愛教大)。吉岡小夜子
- 座長 半谷高久
- 2 C 15 須恵器と花こう岩の Rb-Sr 分布(奈良教大)。三辻利一・(大阪府大)増田康之
- 2 C 16 北海道出土黒曜石遺物の鉛・同位体考古学(名大理名誉教授)山崎一雄・(室蘭工大)室住正世・中村精次・。大江純司
- 2 C 17 地球化学的研究成果の普通教育課程への教材化(横浜国大教育)。武藤 寛・村山治太

D 会場

一般講演(9:00~12:00)

- 座長 阪上正信、中井信之、吉岡竜馬、杉崎隆一
- 2 D 01 富士山周辺の湧水中の V、Al および Si について(東海大海洋)。山縣健二・加藤義久 岡部史郎
- 2 D 02 富士山及びその周辺の天然水の酸素・水素同位体組成について(名大理)。早稲田 周・金 奎漢・中井信之
- 2 D 03 部分循環湖における硫黄化合物の挙動(名大理)。辻 康・八耳俊文・金 奎漢・中井信之
- 2 D 04 三方五湖の核地球化学的研究(1)湖水の Ra 同位体比、U 同位体比および Pu 含有量(金沢大理)。阪上正信・竹井美智子・北沢英宏・塚本政樹・林 巧・中西 孝
- 2 D 05 三方五湖の核地球化学的研究(2)湖底堆積物中の人工($^{239-240}\text{Pu}$ 、 ^{238}Pu 、 ^{137}Cs)および天然(^{238}U 、 ^{210}Pb)放射性核種(金沢大理)。中西 孝・竹井美智子・林 巧・圓尾好宏・阪上正信
- 2 D 06 天然水中のセレンの状態分析(琵琶湖湖水への適用)(近畿大理工)。平木敬三・福永裕三・(甲南大理)玉利祐三・(近畿大教養)重松恒信
- 2 D 07 濃尾平野地下水の安定同位体比および ^3H 濃度による水系の推定(名大理)。中井信之・(愛知衛研)茶谷邦彦・浜村憲克
- 2 D 08 大阪府泉州地域の地下水の水質と地盤沈下量の関係(大阪市大理)鶴巻道二
- 2 D 09 六甲山地周辺域の地下水水質と地質との関係について—一溶出実験法による解析—(甲南大理)。玉利祐三・佐藤文治・辻 治雄・日下 譲
- 2 D 10 第三紀神戸層地下水の水質—浅層水と深層水

の比較—(甲南大理)日下 譲・。福井 要 辻 治雄・玉利祐三

2 D 11 濃尾平野における地下水の水質と流動(名大理)杉崎隆一・(名城大理工)桑原 徹・(愛教大)。杉浦 孜・(三重大教育)森 和 紀

一般講演(13:00~15:00)

- 座長 阪上正信、中井信之、吉岡竜馬、杉崎隆一
- 2 D 12 地質をことにする2つの集水域の河川の長期水質変動について(京大防研)吉岡龍馬
- 2 D 13 牟礼林地試験施設における都市下水二次処理水の陸地還元と地下水水質—水質に関する影響評価—(四国地建)宇山高信・(筑波大)天田高白・(香川大)。糸山東一
- 2 D 14 静岡県における地下水のランド含有量(その1)(静大理)。波多江一郎・神原富尚・長谷川園彦・吉岡潤江・菅沼英夫
- 2 D 15 佐賀県の花崗岩地域の地下水のランドについて(佐賀大理工)松田 宏・。飯盛喜代春・(佐賀短大)飯盛和代
- 2 D 16 第三紀層地すべり地地下水の硫酸塩について(新潟大積雪災害研)佐藤 修
- 2 D 17 地下水中の希土類元素の地球化学(神戸大理)。山本博史・古味秀人・増田彰正
- 2 D 18 ランド放出と地球潮汐(東大理)。中村裕二 脇田 宏・(統計数理研)石黒真木夫・赤池弘次
- 2 D 19 活断層ガスの組成(名大理)。杉崎隆一・(国際航業)武田 浩

第3日 10月12日(月)

A 会場

課題講演Ⅱ 堆積物による環境変動の復元

- (9:00~12:00)コンピーナー 松本英二、増沢敏行
- 座長 石塚明男、増沢敏行、星加 章、松本英二、
- 3 A 01 化石貝殻のイオニウム年代測定法(学習院大理)満田 伯
- 3 A 02 湖底堆積物中のフォールアウト核種の深度分布(金沢大理 LLRL)。小村和久・圓尾好宏 阪上正信
- 3 A 03 海底堆積物中の希ガスの拡散係数(東工大理工)。大隅多加志・(東大海洋研)堀部純男
- 3 A 04 海洋堆積物の間隙水中におけるヨウ素の挙動(東海大海洋)。加藤義久・岡部史郎
- 3 A 05 沿岸域堆積物中のヨウ素の間隙水を通しての挙動(北大水産)角皆静男・。河原利幸
- 3 A 06 初期続成作用における間隙水の硼素の挙動

(東大海洋)石塚明男

- 3 A 07 海底堆積物中の硫酸塩還元と底層水の酸化還元条件(名大 wat 園研)増沢敏行
- 3 A 08 堆積環境がマンガン団塊の成長に及ぼす効果(北大水産)角皆静男・中西圭太・。山田正俊
- 3 A 09 ホウ素による古環境の推定—パキスタンの中古生界堆積物への適用(香川大教育)。稲積章生・坂東祐司・(京大理)中沢圭二

課題講演Ⅱ 堆積物による環境変動の復元(つづき)
(13:00~)

- 座長 石塚明男、増沢敏行、星加 章、松本英二
- 3 A 10 氷床コア中の ^{32}Si 垂直分布と小氷期の気候について(名大 wat 園研)加藤喜久雄
- 3 A 11 日本海溝柱状堆積物に含まれる有機物—Ⅱ—(地調)寺島美南子
- 3 A 12 日本海溝表層堆積物の起源について(北大水産)。山田正俊・北岡博之・角皆静男
- 3 A 13 広島湾における堆積速度と重金属の分布(中国工試)。星加 章・塩沢孝之
- 3 A 14 東京湾堆積物中の炭化水素(名大 wat 園研)。大田啓一・半田暢彦
- 3 A 15 東京湾堆積物中の多環芳香族炭化水素の分布(都立大理)。尹 順子・石渡良志・(地調)松本英二
- 3 A 16 東京湾海底土中における鉛の分布(青山大理工)。平尾良光・轟 裕明・片平善晴・(地調)松本英二・(青山大理工)木村 幹
- 3 A 17 底質からみた東京湾の汚染史(地調)松本英二
- 3 A 18 北海道日高山脈、支笏樽前山系の鉛汚染(室蘭工大)室住正世・。中村精次・吉田勝美・田中裕敏

- 3 A 19 堆積物の花粉分析から見た環境変遷(広大総科)。安田喜憲・矢吹直人・坪田博行・(金沢大教養)加藤道雄
- 3 A 20 汽水湖堆積物の炭素同位体比および黄鉄鉱含量による古気候の推定(名大理)中井信之

B 会場

一般講演(9:00~12:00)

- 座長 土器屋由紀子、加藤喜久雄、安部喜也、江角比出郎
- 3 B 01 冬期大気中のラドンおよび長寿命ラドン娘核種の函館、八丈島、父島における同時観測(北大水産)。倉田隆喜・角皆静男

- 3 B02 海洋大気中における海塩粒子中の大気汚染物質による塩素の脱離（慶応大工）小田切幸成・田中 茂・橋本芳一
- 3 B03 筑波におけるエーロゾル中の窒素化合物および塩化物（気象研）。土器屋由紀子・広瀬勝巳・杉村行勇
- 3 B04 筑波におけるエーロゾル化学組成に現われた St. Helens 山噴火の影響（気象研）。広瀬勝巳・土器屋由紀子・鈴木 款・杉村行勇
- 3 B05 大気中の水銀の挙動：都市大気および温泉大気中の水銀含量（千葉大理）中川良三
- 3 B06 大気中におけるハロカーボン類のバックグラウンド濃度と挙動（東大理）。巻出義紘・横畑彰人・富永 健
- 3 B07 東京都における大気中の重金属濃度と風速の関係（都立大理）。信楽義夫・半谷高久・（気象研）杉村行勇
- 3 B08 北海道における ^{90}Sr と ^{137}Cs の分布（北海道衛研）。福田一義・安藤芳明
- 3 B09 積雪（北陸，中部地域）の化学組成（名大水圏研）北野 康・金森暢子・渡辺興亜
- 3 B10 極域カナダにおける降雪の酸素同位体組成について（名大水圏研）加藤喜久雄
- 3 B11 降水初期における成分元素濃度の変動（国公害研）。安部喜也・西川雅高
- 一般講演（13:00～）
座長 土器屋由紀子・加藤喜久雄・安部喜也・江角比出郎
- 3 B12 降水中の有機炭素含量について（地化協）三宅泰雄・（気象研）。金沢照子・（地化協）猿橋勝子
- 3 B13 雨水中の有機物，栄養塩について（東農工大農）。三角好輝・小倉紀雄
- 3 B14 乾式燃焼法による海水中有機炭素含量の測定（地化協）三宅泰雄・（気象研）。金沢照子（地化協）猿橋勝子
- 3 B15 多摩川上流部の渓流水中の $\text{NO}_3\text{-N}$ （島根穴道湖東浄化セ）江角比出郎
- 3 B16 酸性河川の水質予測 第2報（岩手大工）。後藤達夫・梅津芳江・浅部喜幸
- 3 B17 沖縄の都市河川における物質の動き（琉球大理）渡久山 章
- 3 B18 出水時市街地河川におけるリン，重金属元素の移送形態（愛知公害調査セ）。大塚治子・古田正次
- 3 B19 連続計測値による河川水質変動の解析（愛知公害調査セ）古田正次
- 3 B20 多摩川における鉛の存在状態について（青山大理工）平尾良光・。越川雅之・本田美幸・木村 幹
- C 会場
一般講演（9:00～12:00）
座長 平良初男・立川 涼・倉沢 一・日上部 実
- 3 C01 水中における界面活性剤と金属との相互作用（東海大海洋）広田 致・。金 成一
- 3 C02 河口城底泥中の有機結合態金属について（名古屋公害研）。伊藤和男・松井義雄
- 3 C03 沖縄本島東部海域，中城湾底質における重金属濃度の推移（琉大理）。平良初男・金成正一
- 3 C04 南半球海洋環境の有機塩素化合物（愛媛大農）。立川 涼・田辺信介・河野公栄・日高秀夫
- 3 C05 環境汚染の指標としての杉の樹皮（東工大総合理工）。鶴見 実・田中 淳・一國雅巳
- 3 C06 漂着石油塊中のいおう，バナジウム，ニッケル含有量（海上保安試験セ）吉村広三
- 3 C07 地球化学系としての都市の特徴（都立大理）。半谷高久・大石港山・阡 万元・福島和夫・本波裕美・宮崎昭仁・（東京都）松田雄孝・柏木祐一・（青山学）秋山紀子・（東洋大）大竹千代子
- 3 C08 北関東ローム層中の化学成分（群馬衛生公研）。斎藤武夫・飯塚俊彦・氏家淳雄・（群馬大教）新井房夫
- 3 C09 関東ロームの軽石に含まれる強磁性鉱物（化学分析試料の純化程度と組成におよぼす影響）（川崎宮崎中）青柳隆二
- 3 C10 地質的原因による重金属高濃度地帯の土壤重金属が植物等に及ぼす影響について（長野衛生公研）。荻原克久・鹿角孝男
- 3 C11 超塩基性岩中の炭素の抽出法（東工大理）。渡辺修一・三島和展・大隅多加志・松尾慎士
- 一般講演（13:00～）
座長 平良初男・立川 涼・倉沢 一・日上部 実
- 3 C12 灰十字沸石の Al 含有量と水溶液との反応における元素の選択性（東大理）渋谷靖弘
- 3 C13 オリビン結晶（ Mn_2SiO_4 ）中の2価陽イオンの拡散（東大RIセンター）森岡正名・（学習院大理）長沢 宏・。高桑 優
- 3 C14 ヒシゲライト合成の試み（九大理）。横博幸・樽谷俊和
- 3 C15 非晶質アルミノケイ酸塩の熱的性質に及ぼす

- アルカリ金属イオンの影響（九大理）。横山拓史・荻尾道泰・大坪昭子・樽谷俊和
- 3 C16 Fe-W-O-H-S および Mn-W-O-H-S 系の $f_0_2\text{-pH}$ ダイアグラム（東大理）。渋谷靖弘・飯山敏道
- 3 C17 岩石標準試料 GSJ JG-1, JB-1, JB-2, JA-1, JR-1 の化学組成（地調）安藤 厚
- 3 C18 日本列島の火山岩類とカルク・アルカリ岩の Sr 同位体比（地調）倉沢 一
- 3 C19 East Pacific Rise 海底熱水活動に伴う硬石膏の流体包有物充填温度とその成因（富山大理）。日下部 実・（岡山大温研）千葉仁（ペンシルバニア大）大本 洋
- 3 C20 海水-Dacite 間の熱水反応実験（函館工専）。水上正勝・（Penn State）G. Green

1981年度第1回評議員会報告

と き：1981年2月14日（土）

ところ：赤門学生会館

出席者：木越会長，北野副会長，石渡，一國，岡部，金森，桑本，佐藤，柴田，田中，中井，坂野，本田，松本，馬淵，山岡，各評議員，鳥居監事，増田，高野，各オブザーバー

報告

1. 日本学術会議関係
学術会議から「隕石科学及び隕石による宇宙科学研究の振興について」という勧告が出された。第5回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議の第1回サーキュラーが完成した。
2. 各委員会関係
庶務：各学会員の証記を三宅会員に贈った。
編集：Geochem. J. の刊行状況の報告。
行事：2月例会は「熱水系の同位体地球化学」というテーマで2月14日（土）14時から東大理学部化学教室で行われた。出席者は45名であった。

ニュース：No. 91 は近日中に配布の見込である。
幹事会：第3回幹事会が12月8日学習院大学において開かれた。本年度年会，2月例会，評議員の委嘱，会則検討結果，選挙管理委員会の発足などについて審議した。

議事

1. 評議員の委嘱
岡部史郎氏に評議員を委嘱した。任期は本年末までとし，この場合，同氏の評議員は2期連続したとはみなさない。

2. 1981年度年会について
岡部評議員から示された年会実施案について審議した。
3. 6月例会について
4月の幹事会に一任した。
4. 入退会について
1980年8月末から12月末までの入会は正会員12名，退会は正会員10名（三宅会員の正会員から名誉会員への移行を含む），賛助会員2名で，12月末現在の会員数は正会員818名，賛助会員13名，名誉会員4名，計835名となった。
5. 会則検討の結果について
会長等の任期を関連11学会に問合せた結果が北野副会長から紹介された。任期は1年と2年がほぼ同数で3年という例はなかった。短期間で会則を改正することは困難ということから，会長等の任期は従来のままとすることに決定した。
6. 選挙管理委員の選出について
慣例に従って現在2期目の在京評議員のなかから石渡良志，長沢 宏，不破敬一郎の3氏を選挙管理委員に選出した。
7. 会員名簿の改訂について
新しい名簿は7月上旬に発行することにした。名簿の体裁については庶務幹事に一任した。
8. 評議員・幹事等への旅費の支給について
財政担当評議員が欠席のため，今回の評議員会で審議することにした。
9. 地球物理研連・陸水分科会の委員の推せん
同委員に半谷高久氏を推せんすることにした。
10. 地球化学宇宙化学研究連絡会の委員の推せん
同委員に本田雅健，増田彰正，松尾禎士，酒井均の4氏を推せんすることにした。
11. 国際研究集会「北半球における第4紀氷河作用」の後援と組織委員の推せん
同研究集会の後援を決定し，組織委員として石渡良志を推せんすることにした。

1981年版会員名簿の発行

新しい会員名簿は8月末に発行の予定です。今回から名簿はアイウエオ順になったほか，勤務先の電話も併記するようにしました。これは，地質調査所，筑波大学など電話が各室直通になったところが増えた状況を考慮したためです。名簿に関する資料が未着の方は氏名だけが掲載されていて，あとは空欄になっています。

いずれ正誤表を出したいと思っておりますので，お気づきの点がありましたら，なるべく早く庶務（東京

工業大学 一國雅巳) までご連絡下さい。なお、住所変更、会誌送付先変更などはすべて学会事務センターで扱っております。庶務の仕事は名簿づくりだけですから庶務に上記の件についてご連絡下さっても必しも学会事務センターに伝わるとは限りません。この点お間違いのないようお願い致します。800枚にも及ぶ資料カードから各会員の所属・住所などが2年前のものとはちがっているかどうかをチェックするのは容易なことではありません。どうかご協力をお願い致します。

堆積環境下での結晶の成長過程に関する
第1回国際シンポジウム

Commission on Crystal Growth of Minerals (委員長 砂川一郎東北大学教授) 主催
国際鉱物学連合、結晶成長国際組織、スペイン学術会議、スペイン鉱物学会 後援

主題 Mechanism of crystal growth from solution, and impurities action.

Precipitation, Ostwald ripening and contact phenomena.

Genetic interpretation of surface microtopography of crystal faces and crystal morphology.

Weathering and supergene formation.

Chemical equilibrium in sediments.

シンポジウムは、約10人程度の招待講演者の各1時間程度の講演と、ラウンド・テーブル・ディスカッションを中心として運営され、一般論文はポスターセッションの形式をとる。

日程 1982年4月13日～16日

会場 マドリッド Instituto Geológico y Minero de España

登録料 100米ドル

上記シンポジウムに関心のある方は、Dr. Rodríguez Clemente (Executive Secretary of the Organizing Committee, Instituto del Geología, C. S. I. C., José Gutiérrez Abascal 2, Madrid-6, Spain) までご連絡下さい。なお、アブストラクトの提出期限は本年12月20日となっています。

編集者 佐藤和郎・森岡正名
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F) 日本学会事務センター内
電話 東京 03 (815) 1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 94

1981. ⅩⅢ. 20

1981年度日本地球化学会総会報告

10月11日(日)15時から16時まで、東海大学海洋学部において会員約60名出席のもとに行われた。総会次第は下記の通りである。

1. 開会
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会委員長挨拶
5. 1980年度事業および決算報告
6. 1981年度事業および会計中間報告
7. 1982年度事業計画および予算案
8. 1982-1983年度役員選挙結果報告(別掲)
9. その他
10. 閉会

1980年度事業報告

1. 会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1979年12月末	801	15	4	820
入会	38	0	1	39
退会	21	2	1	24
1980年12月末	818	13	4	835

2. 年会・委員会等開催数

年会	1	評議員会	3	編集	1
総会	1	幹事会	3	ニュース	2
例会	2	財政	1	行事	2

3. 会誌発行

Geochem. J. Vol. 13 (Nos. 5~6), Vol. 14 (Nos. 1~4) (各号とも1500部印刷)
地球化学 Vol. 13 (No. 2), Vol. 14 (No. 1) (各号とも1000部印刷)

4. ニュース発行

Nos. 88~90, 計18頁(各号とも1000部印刷)

5. 学会共催

第17回理工学における同位元素研究発表会(6月30日~7月2日, 東京)

6. 例会

2月9日
重力下での熱平衡-熱は低温部から高温部へ流れる

か

木越邦彦氏

6月14日

極微量元素の分析

- (1) 海水中の重金属分析の諸問題 室住正世氏
- (2) 試料への汚染を避けるために 平尾良光氏

1980年度決算報告

収入の部		予算(千円)
1. 会費	5,038,610	(5,336)
2. 刊行物売上	2,602,733	(3,986)
3. 広告料	0	(100)
4. 助成金	1,590,000	(1,400)
5. 雑収入	207,341	(50)
6. 繰越金	3,635,765	(1,243)
計	13,074,449	(12,115)

支出の部

1. 事業費	9,121,723	(9,646)
1.1 出版費	7,396,688	(7,946)
会誌印刷	6,473,098	(6,678)
編集費	600,000	(600)
発送費	323,590	(668)
1.2 行事費	276,400	(300)
1.3 名簿積立	250,000	(250)
1.4 事務委託	1,077,195	(1,000)
1.5 会員業務郵税	121,440	(150)
2. 管理費	609,494	(1,350)
2.1 庶務費	100,000	(400)
2.2 会議費	141,604	(300)
2.3 通信費	4,040	(55)
2.4 旅費	271,620	(400)
2.5 雑費	92,230	(100)
3. 次期繰越金	3,343,232	(1,164)
計	13,074,449	(12,115)

1981年度事業中間報告

1. 会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1980年12月末	818	13	4	835
入会	33	0	0	33
退会	8	0	0	8

1981年7月末 843 13 4 860

2. 年会・委員会等開催数

年会	1	評議員会	3	編集	1
総会	1	幹事会	2	ニュース	2
例会	2	財政	1	行事	2

3. 会誌発行

Geochem. J. Vol. 14 (Nos. 5~6), Vol. 15
(Nos. 1~3) (各号とも1500部印刷)
地球化学 Vol. 14 (No. 2) (1000部印刷)

4. ニュース発行

Nos. 91~93, 計22頁 (各号とも1000部印刷)

5. 学会共催

第18回理工学における同位元素研究発表会 (6月29日~7月1日, 東京)

6. 例会

2月14日

熱水系の同位体地球化学

- (1) 日本の温泉水・火山噴気の起源 松葉谷治氏
(2) 岩石・鉱物からみた熱水活動 松久幸敬氏
6月13日

新しい年代測定法

- (1) 加速器による年代測定法の動向 中井信之氏
(2) Sm-Nd年代測定法の応用 中村昇氏

7. 役員選挙

8. 会員名簿発行

1981年度会計中間報告 (1981. 6. 30)

収入の部		予算 (千円)
1. 会費	4,510,000	(5,386)
2. 刊行物売上	3,185,000	(4,584)
3. 広告料	0	(100)
4. 助成金	1,510,000	(1,500)
5. 雑収入	39,918	(50)
6. 名簿積立	250,000	(250)
7. 繰越金	3,343,232	(1,164)
計	12,838,227	(13,034)

支出の部

1. 事業費	4,067,927	(10,605)
1.1 出版費	3,490,089	(8,535)
会誌印刷	2,708,369	(6,900)
編集費	500,000	(900)
発送費	281,770	(735)
1.2 行事費	244,000	(300)
1.3 名簿印刷	635,000	(500)
1.4 事務委託	300,000	(1,100)
1.5 会員業務郵税	33,840	(17)

2. 管理費	214,447	(1,560)
2.1 庶務費	150,000	(650)
2.2 会議費	54,597	(300)
2.3 通信費	3,450	(60)
2.4 旅費	0	(500)
2.5 雑費	6,400	(50)
2.6 選挙費	224,000	(0)
3. 予備費	0	(1,164)
計	4,282,374	(13,034)

注: 庶務費の予算 650,000円は選挙費を含む。

1982年度事業計画

1. 年会・委員会等開催数

年会	1	例会	2	幹事会	2
総会	1	評議員会	3		

2. 会誌発行

Geochem. J. 6号, 地球化学 2号

3. ニュース発行 3号

4. 学会主催・共催

第5回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議 (1982年6月27日~7月2日) 主催
第19回理工学における同位元素研究発表会共催

1982年度予算案

収入の部	千円	前年度予算 (千円)
1. 会費	5,435	(5,386)
2. 刊行物売上	4,385	(4,584)
3. 広告料	100	(100)
4. 助成金	1,500	(1,500)
5. 名簿積立	250	(250)
6. 繰越金	869	(1,164)
計	12,589	(13,034)

支出の部

1. 事業費	10,355	(10,605)
1.1 出版費	8,535	(8,535)
会誌印刷	6,900	(6,900)
編集	900	(900)
発送	735	(735)
1.2 行事費	300	(300)
1.3 名簿積立	250	(500)
1.4 事務委託	1,100	(1,100)
1.5 会員業務郵税	170	(170)
2. 管理費	1,350	(1,560)
2.1 庶務費	400	(650)
2.2 会議費	300	(300)
2.3 通信費	50	(60)
2.4 旅費	600	(500)

2.5 雑費	50	(50)
3. 予備費	884	(869)
計	12,589	(13,034)

日本地球化学会1982-1983年度役員選挙結果

会長: 北野 康 (次点 木越邦彦)

副会長: 松尾禎士 (次点 北野 康)

監事: 鳥居鉄也 (次点 不破敬一郎)

評議員

北海道: 角皆静男 (次点 室住正世)

東北: 椎川 誠 (次点 松葉谷治)

関東: 一國雅己, 小椋和子, 小倉紀雄, 小沼直樹,
木越邦彦, 島 誠, 杉村行勇, 田中重男,
田中 剛, 野津憲治, 増田彰正, 松本英二,
馬淵久夫

中部: 岡部史郎, 杉崎隆一, 寺田喜久雄, 半田暢彦,
水谷義彦

近畿: 桑本 融 (次点 西村 進)

中国・四国: 酒井 均 (次点 松井義人)

九州: 兼島 清 (次点 鎌田政明)

選出細則第6条 (II), (1)に基づく次点 神谷 宏

次期年会開催地 琉球大学理学部 (詳しいことについては次号のニュースをご覧ください。)

新入会員 10月10日の評議員会で次の方の入会が承認されました。

下山 晃	秋田大学鉱山学部地下資源研究施設
安部 巖	大阪府立大学工学部応用化学科
北山正治	北海道立衛生研究所
田中裕敏	室蘭工業大学
中村精次	室蘭工業大学工学部工業化学科
竹野節夫	広島大学理学部
前野茂人	日本電子計算(株)
北 逸郎	秋田大学鉱山学部地下資源研究施設
中村孝一	東京大学農学部農芸化学科
佐々木信行	東京大学教養学部宇宙地球科学教室
荻原克久	長野県衛生公害研究所
楠田 隆	千葉県水質保全研究所
玉利祐三	甲南大学理学部化学科
洪江靖弘	東京大学理学部地質学教室
千葉 仁	岡山大学温泉研究所
田中 玲	弘前大学理学部
武藤倫子	秋田県衛生科学研究所
今井 登	工業技術院地質調査所
田辺宏敬	道都大学
大田啓一	名古屋大学水圏科学研究所

仁科淳司 東京大学理学部

瀬長真知子 琉球大学理学部化学科

1981年度第2回評議員会報告

とき: 1981年6月13日 (土)

ところ: 赤門学士会館

出席者: 木越会長, 石渡, 一國, 岡部, 佐藤, 杉村,
田中, 中井, 不破, 松尾, 松本, 馬淵, 綿坂
各評議員, 鳥居監事

報告

1. 各委員会関係

庶務: 本年度年会開催の依頼を4月1日付で東海大学学長あて送付した。

財政: Geochem. J. 14巻1~6号を文部省に提出した。

編集: Geochem. J. 15巻1~3号が近日中に刊行される予定である。地球化学15巻1号は編集途中である。

行事: 6月例会は「新しい年代測定法」というテーマで6月13日 (土) 14時から東大理学部化学教室で行われた。出席者は23名であった。

ニュース: No. 92を5月に発行した。

幹事会: 本年度第1回幹事会を4月18日 (土) 14時15分から学習院大学において開催し, 6月例会, 本年度年会, 役員選挙, 専門委員会の設置などについて審議した。

2. 第5回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議について
配布資料に基づいて, 参加申込, プログラム編成, 会場, 募金などについて説明があった。

議事

1. 1981年度年会について

年会準備状況について審議した。

2. 1982年度予算案について

来年度は会費の値上げを行わず, 従来通りの方針で予算案を作成することにした。

3. 入退会について

1980年12月末から1981年3月末までの新入会は正会員11名, 退会は正会員5名で, 3月末現在の会員数は正会員824名, 賛助会員13名, 名誉会員4名, 計841名となった。

4. 専門委員会の設置

「隕石試料による宇宙化学研究専門委員会」を設置することにした。委員長は本田雅健氏である。

書評 「堆積盆中の流体移動—石油・水・熱の流れを追って」

編者 杉山 隆二・池辺 稔・星野 通平・
柴崎 達雄

堆積盆の研究で、過去研究者はそれを構成している岩石の部分とにかく目を向け勝ちであった。すなわち、堆積盆の変遷史、構造発達史、堆積岩の続成変化などに関する研究成果は無数に得られている。しかし、堆積盆の地層中に含まれる流体に関しては、流体そのものの性質などは比較的明らかにされているが、流体移動については未だ不明な点が極めて多い。従来、堆積盆の比較的浅いところでの流体移動は水文地質や、温泉地質の分野で取扱われ、比較的深いところでのそれは主として石油地質の分野で扱われてきた。この両分野間での対話はほとんど無かった。しかし、同じ堆積盆中での流体移動であるので、互いの研究成果と問題点を披露し合うことは今後の両分野の発展に有益であろうと考えるのは自然である。

本書はこの趣旨に沿って昭和55年9月に東海大学海洋研究所地殻研究部が主催した同テーマのシンポジウムの成果内容をまとめて出版したものである。著者は石油地質、水文地質、構造地質、地熱・温泉などの分野で第一線で活躍している20名であり、次の5つの部門に分けられている。第Ⅰ部：石油の流動と集積、第Ⅱ部：地下水の移動、第Ⅲ部：地熱と温泉水の移動、第Ⅳ部：堆積盆の形成、第Ⅴ部：総合討論。第Ⅰ部では最近の石油成因と一次移動論のレビューのほかに一次移動と集積における水の役割、移動の営力、メカニズム、さらには近年の新しい傾向である油田形成のシミュレーションモデルに到るまで幅広い問題で、各著者独自のアイディアが紹介されている。第Ⅱ部は地下水の流動系、水の収支、さらにそれに関連して地下水汚染の公害問題にも言及している。第Ⅲ部では温泉水の流動、温泉胚胎層の水理定数などに関するケーススタディのほかに熱水挙動および熱水貯留層の成因について主として物理的側面から地熱エネルギー開発を念頭において考察がなされている。第Ⅳ部では大陸マージンにおける堆積盆形成と油田分布の関係、石油貯留構造形成に果たしたマグマ性陥没盆地と島弧変動の役割が著者独自のアイディアでまとめられている。また、流体移動におけるハイドロリック・フラクチャーの役割についても解説がなされている。

以上のように石油・地下水・地熱流体などの資源の探査・開発のほかに、地盤沈下・地下水汚染など身近な環境問題など堆積盆中の流体移動と深い係りのある数多くのテーマについて最新の情報が余すところなく網羅されており、この方面の専門家はもとより、地球化学、地球物理、土木、建築、農業、気象関係者並びに地学教育者に一読をお奨めしたい一編である。(B 5

版 356 ページ、発行者 東海大学出版会、頒布価格 6,000円) (石油公団 浅川 忠)

第4回 水-岩石相互作用国際集会 (WR I-4) の会期について

上記国際集会の会期は1983年8月29日～9月8日です。詳しいことは第1回サーキュラーをごらん下さい。サーキュラーの請求先は岡山大学温泉研究所 酒井均教授です。

第5回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議組織委員会事務局からのお知らせ

表記国際会議の日程・場所・討論課題が次の通り決まりました。詳細は Second Circularをご覧ください。

日程 1982年6月27日(日)登録、カクテルパーティ
6月28日(月)～7月2日(金) セッション

会議場 日光市総合会館(日光市安川町2-47)

野外巡検 A 中部本州 7月3日～7月8日

B 富士・箱根・伊豆 7月3日～7月6日

Organized Session 課題 (Organizer)

1. Isotopic constraints on mantle and crustal evolution (R.K. O'Nions)
2. Terrestrial noble gases (F.A. Podosek, I.N. Tolstikhin)
3. Isotopes applied to paleo-environment (E. Galimov)
4. Cosmogenic nuclides (J.R. Arnold, M. Honda)

IMPORTANT DATES

The Conference registration fee (¥22,000), accommodation charge* and the registration form A-1 must be received by February 28, 1982

Full payment for Field trip (Form A-2) March 31, 1982

Abstracts must be received by April 30, 1982

*国内参加者向け和式旅館の申込締切は3月31日。

Second Circularご希望の方は下記宛て請求下さい。

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3

工業技術院地質調査所地球化学課内

第5回年代同位体国際会議組織委員会事務局

柴田 賢

編集者 佐藤 和郎・森岡 正名

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会センタービル(4F) 日本学会

事務センター内

電話 東京 03 (815) 1903

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920 - 833

日本地球化学会ニュース

No. 95

1982. V. 4

1982年度年会は琉球大学で開催

日時 10月18日(月)～20日(水)

会場 琉球大学教養部(沖縄県西原町字千原1番地)

[交通] 市外バスターミナル、国際通りの市外

バス停留所(保健所前、松尾、牧志、安里、大

道)から新琉大線(那覇交通)にて琉大東口下

車。または、琉球バスにて琉大終点下車。約50

分。タクシーで那覇市内から約30分。

内容 課題講演、一般講演、および特別講演。

課題講演は、「岩石と水の相互作用」「サンゴ礁

の地球化学」「海洋の化学」の3テーマを予定

しています。

懇親会 10月19日(火)18時からグリーンプラザ(浦

添市西原)にて。会費4,000円(学生2,500円)

エキスカージョン 10月21日(木)8時～18時30分。

費用4,000円(昼食付)。観光バスによる沖縄本島

巡り。主な行先地: 東南植物楽園(沖縄本島中

部)、万座毛、海洋博記念公園(沖縄本島北部)

講演申込締切 6月26日(土)

申込受け次第、講演要旨オフセット用原稿用

紙をお送りします。

講演要旨原稿締切 8月21日(土)

参加、要旨集、懇親会、およびエキスカージョン申込

締切 9月11日(土)

以上の申込みには必ず所定の申込用紙を用いて下さ

い。申込用紙は地球化学会ニュースに添付のものを

用いるか、年会実行委員会宛てに請求下さい。

要旨集金代3,500円(学生3,000円)、懇親会費、エキ

スカージョン費用は上記申込期日までに、銀行振込

(琉球銀行、宜野湾支店、普通065754、日本地球化学

会年会実行委員長 兼島清)または郵便振替(鹿児島

一6-11381、1982年日本地球化学会年会)にて、御

送金下さい。(講演申込者には要旨原稿用紙と一緒に

振替用紙をお送りします。)尚、要旨集代金は、予約
申込のない時には3,800円になります。参加費は不要
です。

申込先および連絡先 〒903-01 沖縄県西原町字千原

1番地、琉球大学理学部内 1982年度日本地球

化学会年会実行委員会、兼島清(あるいは平良

初男) 電話09889-5-2221 内線2656, 2657, 2654

＜宿泊および往復航空運賃の団体割引サービス＞

宿泊および往復航空運賃の団体割引を下記の通り名

鉄観光サービス沖縄営業所(那覇市久茂地2-14-7、

電話0988-62-8211)で行ないますので、8月21日

(土)までに営業所へ直接お申込み下さい。下記の料

金表は1人当りの費用です。

出発地	東京	名古屋	大阪
エコノミーホテル(シングル)	79,500 ^円	78,200 ^円	69,400 ^円
” (ツイン)	77,500	76,200	67,400
” (トリプル)	75,500	74,200	65,400
ビジネスホテル(シングル)	75,500	74,200	65,400
” (ツイン)	73,500	72,200	63,400
民宿	65,000	64,000	55,000

費用に含まれるものは、発地からの往復航空運賃と

4泊5日の宿泊代(朝食付)、とホテルから会場(琉球

大学)までの送迎バスの代金です。空港、ホテル間の

交通費は含まれません。エキスカージョン参加の場合

は、さらにホテル一泊分(6,500円)が追加されます。

また、デラックスホテルを希望の方は、上記の金額よ

り約2万円余分にかかります。

年会は日本地球化学会の主催 日本化学会の共催です。